

の生活のまだ始つてゐない青年の愚圖々々してゐるのよりは、進んだ段階に達してゐた。素描のやうな牧歌は、妙齡の女には飯事めしのやうに想はれ、力になる男の方に惹かれ、十分圓熟した力の光に惹かれる。女は罪もない、夢ばかりの小説を忘れる。その無邪氣な小説の中には、愛の言葉は一つも囁かれず、その唯一の挿話は、あまりに劇しい胸の動悸や、散歩を長引かせたり、花束を貰つたり、良く映るから毎度晴着を着たりするくらゐのものだつた。こんな感情素描のことを考へると、若い女は自分を見極めることとはしないで微笑する。若い男の方は、さう早くは忘れない。若しル・ガリックのやうな、心の移り變らない、氣の小さい、引込み思案の、夢の多いブルターニュ人だと、さういふ人の中では、時間が印象を消すことはしないで、それを掘り下げ、十五六の頃の幼い許嫁を、大きくなり心痛となる熱情をもつて、相變らず愛し続けるのだ。血の出てる疵だが、それを穿つた女には殊に隠してゐるものだ。彼はどちらかといへば、責めて貰ひ、訴へて貰ひたいのだ。そして、認められなかつただけに、一層忠實であることに、痛々しい、喜びを味ふものだ。若し彼と彼女とが同じ家庭にゐなければ、不在とい

ふことのために癒るかも知れないが、彼は絶えず會ふのだ。若し遊び友達のやうに、官能的の娛樂がなければ、小説じみた花が萎れて了ふのだが、それもル・ガリックのやうな信心家だと、却て清淨なことが、愛の熱を養ひ、それで愛してゐる女はと言へば、結婚してゐる。で、彼は極些細な缺乏の苦みすらあきらめ、それかといつて、女を愛することを續けて行くのは赦されないのだ。さう想へば、ル・ガリックの振舞が悉く解つたやうに、それと並行してオルテグ先生の素振りも悉く解るやうだ。彼が妻を愛すると同じやうに、誰しも熱烈に女を愛する時は、千里眼のやうに女の鼓吹する感情を解してゐるものだ。オルテグ先生は、直観でル・ガリックの秘密を知つてゐた。それをオルテグ夫人は今まで知らなかつたのだ。私は尙こんなことを悟つた。この婦人は何時も從弟を多少子供のやうに、また大變單純な頭の者のやうに考へてゐたのだ。學者の妻で、學者の娘だつた彼女は、士官が始めて療養所を見物に來た時に、私のちらと認めたこと、また私がたつた今負傷者の寢臺の枕元で、彼の宗教的信仰の與へた内生活の異常な廣さで、私に認めさせたことを、彼女は嘗て認めたことはなかつたのだ。彼女はあんな澤山

の勇ましさを、あきらめ、慈悲、確實さに對して、その發見をしかゝつたのだらうか。明かにオルテグ先生はそれを心配してゐたのだ。かうなれば、先生が嫉妬に夢中だつた譯も解るし、また負傷者によつて表はされた、しかも、その最高試煉の見通されてゐたことも解るのだ。たうとう、それが知れ理解され、恐らく自分は愛せられてゐると感じたことは、いかに強く、また何といふ誘惑だつたことだらう！。

自分の生涯中に澤山作り上げたやうに、其處に心理的の建築が一つあつた。私は跛の見つともない不具のせいで、幾分か他人の傍に立つて、人生の悲喜劇の中で、役者よりも寧ろ見物人になつてゐた。私は大に眺めるし、大に想像を働かせる。私は大に、また毎度、誤つたものだ。今度はさうでない。大罪——私は相變らず心中をかう呼んでゐた——が成されるのを見るかも知れぬといふ怖れは、私の觀察力を緊張させてゐた。そして従弟の精神の持ちかたから、突然惹起した理知的興味の中からオルテグ夫人を眞正まこと面に見ることにしてゐたからと言へ、私はその實證をほとんどその場でつかんだのであつた。

何うして、クールモン師は、ル・ガリックの心づかひを消散させようといふ氣になつたのだらう？ 唯想像から判斷してか。それとも、オルテグ夫人が負傷者の枕邊にゐ

ることは、彼女のために、先生のためには迎もだが、信仰の心變りが起るものと考へた爲であつたのか。何時も暗黙の一致ができるので、若い夫人は、從弟に對して、看護婦の役目を多少始めた。彼女は繻帶の手傳ひをした。その食事にも注意した。彼女と長い話をするにはやめてゐたが、時折人生の解釋や、物、人、讀んだ書物などについて有つた判斷について洩らす二口三口、また靈の豊かさから出る、あらゆるあらはれが、彼女に心遣ひをさせてゐた。この看病の四十八時間後に、既に彼女は私に質ねた。

「マルサルさん、あなた一生に信心の篤い人を澤山知つてゐらつしやるでせう。」

「母の他には誰もありません。ほんとに知つてゐるといふ意味では。でも、誠實な信者は、自分を示さない者です。また聖書の、いつもあの言葉の中のものですが、汝わが爲に祈らんと欲せば、汝の室に入れ、そしてひそかに祈れとあります。」

「ですが、誠實な信者と知つてゐられる人達が、またよくは知らぬ人でも、その人達の信仰が力を與へたことのある例を御覽なすつて？」

「仰しやる言葉はよく解りませんが、信することはそれだけで力です。」

「質問が拙かつたのですが、從弟の出した力は、今日は大變大きい苦痛に對して、昨日はあんなに冷靜に死に對して、忍んで來たやうですが、あの力は思想から出たものでせうか、それとも性格から出たものとお考へですか。これを知りたいのでした。」

私は答へた。

「双方からですね、双方とも関係がありますから。」

彼女は尙言つた。

「でも、随分不思議といへば、不思議ですね。間違つたことの中からでも、力になることを見つけることができるんですね！」

彼女のことは驚くことばかりであつた。二三日後に、良人に對して、ある意見を主張してゐる彼女を聞いて、私は驚いた。それは彼女の頭腦の中で、明かにある進化が行はれてゐることを洩すものであつた。オルテীগ先生は話の中途であつた。

「ル・ガリックが先刻言つたことを知つてゐるね？ その例は澤山挙げられることだが

ね、將校の彼は其處にゐたんだ。なのに、マルヌの戦争は奇蹟だ……何故か？ 戦術の學問上からは、到底解釋はできないといふのらしい。僕は答へてやつた。では、説明ができませんといふんだね。必要條件は十分解らんが、とにかく事實があつたといふのだね？ すると彼は、さうです。超自然のことですと言つたよ。マルサル君、一九一四年にこんな考方をするとは、不思議だらう。これは何百年もの反覆事件だからね！」

「でも、世の中には、解らぬことがありますよ。」

と、オールテীগ夫人は言つた。

「事實しかないんだ。」

「でも、それでは……」

彼女は躊躇したので、先生は突きつめた。

「でも、それでは、何うしたんだ？」

「でも、ル・ガリックの假説は、それでないものと同じやうに、眞理かも知れませんか？」

「すこし理屈を言はう。現在隣室に何かがあるか、あんたは知らんだらう？ その部屋にお伽噺の動物の、人馬だの、一角獣がゐるといふ考をもつ権利があるといふことになるかね？ 我々は未知といふものが何んなものか知らぬ。我々はあり得ないものだけは完全に知つてゐるんだ。」

「それでも發見前のヘルツ波動だの、ラヂウムは……」

「何處まで例を引かうといふのかね？」

「かうなんです。力が宇宙を働かせ、その存在を私達も疑つてゐないので、超自然のことを話す時だつて、ル・ガリックは別に他のことを肯定してゐるではありませんわ。」

「失敬だが、彼はその力をポシブルだとは言はないで、實在現実のものだとしてゐるんだ。」

「ですが、何が何でも、實在性が一分でもなかつたら、何うして力を取出せますか。實在に働きかけるものは矢張り實在でせう。」

「彼に働きかけるものは、それこそ彼の思想だ。でも、誤つた思想だつて、眞の思想と

同様に、時には、より以上に、意志を決定するものだよ。」

その時、私は口を出さずにはゐられなくなつた。オルテグ夫人の提出した異説は、二三週間前から、私の頭にあつたものと、あまり似通つたところがあつた。議論が今私自身にとつて興味のあることだつた。

「正確でせうか、先生。たしかに誤つた思想も私共を動かしますが、私どもの行爲は、忽ち現實に突き當つて取消をしなければなりませんまい。」

「では、現實がル・ガリックの神秘の空想に、取消をさせはしないと想ふのかね。それこそこの怖しい戦場が……」

「先生さうは想ひません。あの人はそれを解釋し、それに調子を合せるのです。」

「僕に十分道理があつたかね？ 第一に清く正しくだ。君にも病毒がまた現れるよ。君達兩人の理知に訴へるよ。感性や想像力にはないよ。僕等の希望なり空想は、眞理の探究には何にもならんよ。要するに、手を觸れることのできないもの、考る勇氣を有たなければならぬ與件、科學的經驗の與件と世界觀とを、一致させる必要があるんだ。と

ところで、あらゆる考の中で、唯一つがこの與件と矛盾しないのだ。永久、無限で、常に要素も法則も同一で、何處までも創造し、破壊し、何處までも革新し、始めもなければ終りもない、従つて目的のないものだけだ。存在するものは、すべて、個も、類も、遊星も、この混沌とした淵から浮き上り、また其處へ墜落するのだ。我々はこのエネルギーの力に限界のあることは知らないんだ。その法則は恒久であるが、悉くは知らん。だから、奇蹟といふやうな曖昧な、要するに混線といふ以外にないことがあるのだ。我々は欲望でも、夢でもそこへ容れるのだ。それが超自然だ。尤も誰かがル・ガリックに混線のことを話したらうね！ 要するに、多分彼は光明線のあることと、その線の交叉が光の減少を生ずるといふことを知つてゐるのだ。彼は士官學校サレン入學のために、多少物理学をやつた筈だ。それが自分の役に立つやうにね！」

彼はこの最後の句をいかにも辛辣に言つてのけたので、話は途切れてしまつた。嫉妬の念が、又もや彼の心を咬んでゐたのだつた。夫人も私と同じやうに、確かにその事を明かに解したやうだつた。この話をした後の幾日かの間、負傷してゐる彼を、彼女が部屋に見舞ふことが次第に少くなりだした。彼女は二度に一度は、代理の看護婦を遣つた。その代りに良人に對する心づくしは一層増したのだつた。絶えず、夫人は良人の憩うてゐる時は、その事務室に戻つてゐた。先生が其處にゐる時は、夫人は彼から目をはなさなかつた。その些細な疳癢も心配し、極些細な素振りにも察しをして、心を和けることに熱心であつた。ところが、その注意の配りやうが倍にもなつたことは、先生を和けるどころか、却て先生の苛々するのを増すやうに見えた。先生は看護する者に對して、病氣を恨む恩知らずな病人になつた。

「イディップ王が一番嫌つた人間は誰ですか？」

と、ある日、私の受持の瘦せた病人が言つたことがある。私はその病人の親類の女が、誠實を十分以上につくしてゐることを知つてゐたので、病人の酷なことをたしなめた。

「それはアンチゴーネだ。といふのは、盲人なことを刻々に知らしてゐるからだ。」

オルテグ先生の夫人に對する無法が募るのに對して、われ知らず、この吐出すやうな言ひかたをしたことを想ひ出して、その機智の中に、遺憾ながら人間の悲しい眞理がかくれてゐることを私は感じた。

けれども、先生に無法なことばかりがあつたかと言へば、行爲の上からばかり見る者には、さうであつた。家庭を知ると、今私はそれを奥底まで知つてゐるので、行爲は何程でもなく、感情の方が全部だつた。オルテグ夫人は、良人の元氣が衰へるのに堪へかねて、療養所を逃げ出したこともあつたことであらう。さうしたにしたところで、病氣の良人は、さう恨めしくも想はなかつたことだらう。「彼女はこんな私を見て、酷く惱んでゐるのだ。でも、この身を愛してゐてくれるのだ」と、心の中で想つたかも知れな

かつた。それにしても、彼女が先生に對して、私に對してのやうに、些細なことに心遣ひをすることの殖えて來たことを、常に意志の努力が現はしてゐた。とりわけ、計畫的の逃避、従弟を避けるやうにすることは、彼女が煩悶してゐることを證明してゐた。何故さうなのか。それは彼女の内心に侵入して來る、新しい戀愛のやうなものではないが、新しい興味に對しての警戒だつた。また、別の人が彼女に向つて潑刺となつて來たのだ。感情のいきさつを寫し出さうとする時の言葉は、極めて粗雑な代數のやうなものである。公式は略こんなところといふ邊に漂つて、甲の魂が乙に對して起した悲劇だの、また昔の優しい心持の行き着いたところを發見して、怖しく後悔したりする一種の飽和状態や、殘酷な段階だの、微妙な區別のある精神状態を寫し出すには、殊にさうだ。この飽和といふ言葉は、随分専門的で劇しいものだ。それは、良人に新しい感情を感じて貰ふことは、夫人が不可能なところにあることを、非常に正確にあらはしてゐるのだ。これに反して、幼友達から不意に示された詩歌の、彼女に與へた感じの中で、一切が新奇であつた。彼女は彼を賢い子供だ、若い人だ、成績の良い士官學校の生徒だ、勤勉な士官

とばかりおもつてゐた。ところが今度見たら、十字軍の戰士だつたのだ。しかも、その時は、良人に對する熱情が、現實的といふよりも相變らず想像的であつて、もはや意志の中にしかなかつた時であつた。われらが悲劇的の話をした際、それは戀をした後に、また新しい戀をしたり、過去に對してわが身を否定したりする婦人の厭さ憎らしさを、曾て彼女が語つた時に、こんな告白が洩れたことがあつた。

「一番怖しいことは、生きてゐて、我知らず氣の變ることですわ！」

彼女は感性の涸れることに、疾くから用心してゐた。自殺を申し出たといふ狂氣の沙汰には、實は動機として、痛はしさの極みである良人の悲慘を慰めたいといふ、抑へ切れないものがあつたばかりではない。わが戀に絶對的盲目的に、忠實でありたいといふその證據を、彼女はわが身に與へようとしてゐたからだ。ある感情が傍で大きくなりつゝある今となつて、何うして尙こんな錯覺を作つたのであらうか。ましてそれが強くなり、復活の様子を伴つてゐる時だ。父の思想で催眠術にかけられたやうに無信仰者となつた前の、宗教的の若い娘だつたのが、彼女の今の心の中に蘇りつゝあつた。同時に、

彼女は、夢程も感じないでゐた煩悶の痕や、嘗て消えてゐた十五の頃の、微塵も氣のついてゐなかつた小説めいた記憶が俄に活氣づいて來たことを、其處に見出しつゝあつた。看護婦と負傷兵とが、私の前で、時によつては、オルテグ先生の前でも、よく取交はす會話の中に、「あなた覚えてゐて？」といふ言葉が、絶えず往來してゐたものだ。昔の遊び仲間ならば、他人に詰まらなくても、唯當人達だけには、別種の場面が繰返されるものである。で、それには、オルテグ先生は無關係のことだつたが、夫人にとつては、そんな想出に魅力があるのではなかつたか。彼女は、現在の悪夢から、その爲に解放されるのであつたらう。

多分、これも假説程度で、このやうな想ひを書くのだが、私の何時も繰返す心理的環境の結果がそこにあつた。どんな記號で、或エネルギーの、例へば電氣などの存在を認めるかといふに、それが直接われらに印象を與へるとか、後にわれらに印象を與へるところの、他のエネルギーに變ることによつてだ。光と熱とは第一群に屬し、電氣は第二群だ。私達はそれを直接認識してはゐない。だから、長い間それが知れなかつた譯だ。

心理的環境はあつても、それは神経中樞とは別で、神経が力を取出す所もある筈だ。脳は實體であつて、思惟の機關ではないといふブランヴィルの法則は、私と同じ假説を含んでゐるのではないか知ら？ 私は迷つてゐる。唯、私は一層一般的な法則に、私の見たテレパチーか、或は、もつと正確にいへば、テレステジアの現象を結びつけたいのだ。ミエールはそれを定義して、「腦と他のものとの間に、あらゆる既知の感覺路とは別に、ある種の印象傳達があるのだ」と言つた。科學の大家だつたゲーテも言つた。

「ある靈は唯存在することによつて、他の靈に強く働きかけることがある。」と。ル・ガリックがオルテグ夫人に働きかけた精神上の影響は、この二種の作用ではなかつたのか。彼は彼女を愛してゐたのだ。そして、しかも、彼は烈しく愛してゐたのだ。私はそれを後に敢て自分からでなく知つた。彼が神との不斷の對話中に、彼女を聯想してをり、祈禱や冥想が無限に永引くのは、毫も疑ひのないことだつた。恰も秘密な愛の中心から發する光が、若い女を包み影響するやうに、すべてが經過するのだ。磁氣の流れによつて二つの極が結ばれるやうなものだつたのだ。尤も流れといふものは、傳導境とも



言はれるものだ。多分、尙私はル・ガリックの取るべき見地に移つて、唯信じない者には見えないが、信仰のある者には、日常のことであるところの、奇蹟の一つに、私は立會つたのだらうか知ら？ 多分さうだ。負傷者の熱心な祈りこそ、幾週間か前から不幸な者の上に歴しかかつてゐた魔法の祓ひをすることができたのかも知れぬ。

こんな假説がこの頃から私の思想を唆つてゐた。それはまた面白いことであつた。しかし、苦しんでゐる良人には、妻のこの進化の原因や、その影響の原理は、病氣が焦させ、嫉妬によつて残忍にされ、横柄で昂奮つたオルテグ先生には關係のあることではなかつたのだ。あんなに長く彼にすべてを捧げてゐた女の、心の煩悶とその起りとが、先生の聰明さから遁れてはゐなかつた。といふのは、彼とル・ガリックとの間の感傷的な競争は、また別のものが加はつて倍になつてゐたからである。オルテグ先生は、戀愛にも、また非宗教さにも熱烈であつた。競争の敵として、熱烈な信者を有つことは、彼の苦痛を倍にするものだつた。今日のことを考へると、しかも、遠くなつてからでも、沈黙して過された名残りの月日も、殉教者のものだとおもへば、私は戦くのである。私

はその後、夫人が幾時間もの間、彼から一言も發せしめることのできなかつたことを知つてゐる。崩された城の中で、天守だけが破れた建物の立派さを、その高さから證明して突立つてゐるやうに、私が知つて、大に讚美してた、凱歌をあげたオルテグ先生の矜持だけが残つてゐたのだ。オルテグ夫人の、あの打明話から、彼女が私の前で、ル・ガリックの枕許で、犠牲になつたあの無法な場面は、二度と繰返されなかつたことを了解した。二週間近くも續いたあの時期の間にも、嘗て先生は、益々進む瘦せ方と、段々嵩じて強くなる黄疸が、病氣の容赦しない進行を告げたにも拘らず、自殺の約束のことは彼女に話さなかつたのだ。先生はもはや、二三時間しか起きてゐられなかつた。それでも、會ひに来て、敢て忠告する同僚の人達の非難があるにも拘らず、常に療養所を去ることは拒んでゐられたのだつた。次第に目に見えて、先生は苦痛を訴へられ、モルヒネ注射の度は加はつた。こんな状態は肉體的にも、精神的にも、長く續く筈はなかつた。私はそれを了解してゐた。私の觀察では、危機の近いことを告げるものが頻々とあつた。病人は元氣が盡きてゐたが、人間として、嫉妬の果てには立つてゐなかつた。

先生はそれを證據立てようとしてゐるのだつた。

ある朝、例の如く、夜間看護婦の報告を知らせに寢室に往つた時、先生は起きて書齋にゐられると言ふことだつた。成程、先生は事務机に凭つて、書類の整理中で、ある物を分類し、ある物は大きな火中に投じてゐられる所だつた。私は前から知つてゐるので、早速この整理は準備だなどいふことが解つた。何時もはエダ・ジュニ廣場の仕事机の上にあつた大きなアカジウの長い箱が此處に置いてあるのに目がついた。私はそれに書狀が詰つてゐることを知つてゐた。私が差出した書類を、一瞥するや否や、何時もは、すぐ缺點を探されるのであつたのに、

「よろしい、何處か君の氣づいた事はないかね？」

といふ先生の質問であつた。

事實、先生は療養所で出會した最も興味のある患者の日記をつけることを、私に依頼

してゐられたのであつた。

「僕は大いにそれを大事にしてゐることは言つたね。僕の仕事は、物的には此處で思ひ通りには行かなかつたがね。でも、僕は、いや僕等は良い仕事をしたよ。これが科學に役立つに相違ない。觀察は全部でどれだけかね？」

「約五十です。」

「淨書の残つてゐるものは？」

「十一か十二です。」

「よろしい！ マルサル君、君は極めて苦しい際に、大變いゝ救助になつてくれるよ。

君のあはれな教師に全く親切にしてくれるだらう？ この十一か十二の最後の觀察を今から明朝までに濟ませて貰ひたいがね……。」

「お役に立つことでしたら……。」

「ケノーとルナールで十分だらう。彼等に命令して置くよ。」

ケノーは先生の衰弱以後手傳ひに來た外科醫で、大變上手な手術者だが、それでも、

先生に始終話して貰ひたいと言つて、私を悩ましてゐた。教師の前では、彼は私同様に小兒になつてゐた。ルナールはまだ不十分な學生で、寄宿して私どもを手傳つてゐた。

「それでは今から明日までに全部書き上げませう。」

と、私は答へた。

「ありがたう。この文書は最近の醫學アカデミーに報告したいのでね。それに見直す必要もあるんだ。人間の生死は分らず、また僕の様子では……。」

この言葉をいふのに、先生はある微笑を浮べてゐられるのだつた。それは焦れつたいところと、苦味ばしつたところが甚くあつたので、私に全く疑ひの餘地はなかつた。先生と別れた時、私は寒氣を感じ、脚は震へてゐた。先生の決心された明證を私は握つたのだ。その證據はオルテীগ夫人に出會つて一層のことだつた。彼女は非常に蒼い顔の上に、表情が動かなくなつてをり、目の瞬きが殆ど痙攣的で、自分と物との間に挿まつてゐる恐怖の影の外には、もはや何も見えない様子であつた。もしさうであつて、期限が來たのであつたら、躊躇は許されず、またその期限が來たことは、極めて簡単な出來

事を見る第三の、反駁のできない證據になるのだつた。文書整理についての先生の請ひと、彼女のびつたり合つた調子は、私の疑念をすっかり消散させた。十時半頃、先生は又も私を呼んだ。先生は嚴肅な顔つきの人と一緒にあつた。その人は今までにも先生の宅で會つたことがあり、先生の公證人以外の他の人ではなかつた。先生は話しかけて、「僕はマルサル君、君に言ふのを忘れてゐたが、今日メチヴィエーさんが、僕がゐなくなつた時の、此處に於いての君の位置を決定する證書調印のために見えたのだ。」

「またそんな事を仰しやる！」

肥つた公證人は駁した。六十位のだぶ／＼と肥りすぎた、がっちりした様子は、強ひて元氣づけていふ瀕死の人と極端な對照をしてゐた。

「先生は御氣分の良さ相なお顔ですよ。それに私どもの、また弟子にしましても、研究上何時も觀察してゐることですが、かう遺言書を作つて置きますと、元氣が復活するものですが、先生にはそんなことは必要なくらゐでございますよ……。」

「あなたはマルサル博士に證書を見せてあげて下さい。」

オルテীগ先生は、月並の殘酷な、心からでない皮肉で、慰安のその言葉を取合ひもせずには言はれた。メチヴィエー氏は印紙を貼付した書類を私に渡した。私は形式上それに目を放つた。

「先生は遺言書の見直しに公證人を呼ばれたのだつた。その事は先方が言つたことだ。これ以上何を待たう？」

と私は考へた。さうして、最後の箇條書の下に署名するや否や、急いで私は暇乞ひをした。私はその足でオルテীগ夫人の部屋へ行つた。夫人は不在であつた。私は病院中を探したが、何處にも彼女は見えなかつた。我慢しきれなくなつて、玄關を預つてゐる書記に質したら、夫人は外出されたといふことだつた。即時本能的推理で想つた。「若し自殺が定つたら、今オルテীগ先生同様に、内密な書類整理をしにエタ・ジュニの廣場へ行かれたに相違ない。何うしてそれを知つたものか？ 電話をしようか？ 若しあちらへゐられても會つて貰へなくなるかも知れん！ 行かうか？ 不意を襲はうか？ 試して見よう……。」

仕事の上着を脱ぎ、モーニングに着換へ、タクシーを呼び止める時間もそこ／＼に、私はサン・ゼルマンの大通、河岸、マルソー通りとビゼー街を、外科の流行兒だつた先生のもつと幸福な時代に、あれ程屢々訪問したところのあるあの屋敷へと走らせた。この道順の間、私の想ひは何といふ騒ぎかただつたらう。それから私の質問に對して門番が、「奥様は一時間前からゐらつしやいます。お取次いたしませう。」と、答へた時、何といふ身の引緊りを私は感じたことだらう。「それには及ばん。奥様は待つてゐらつしやるんだから。」と、この男を遠ざけるために、私はかう言つた。

私は彼女が内輪の整理に當つてゐるのなら、三階の小さなサロンに違ひないと信じて、階段の方へと飛んで行つた。二階のサロンは得意の客との應接にあてゝあつた。私の周圍の物の姿は、階段を辿つてゐる間に、病氣前のオルテグ先生を想ひ出させてゐた。先生は名高い賣立の時、烈しい競賣に、玄關に立つてゐたイタリールネイサンスの立像の値を争つてゐられたことがあつた。壁に掛けてあるスペイン絨氈は大回顧展覽會に、

蒐集家としての彼の名で出してあつたものだ。先生によつて救はれた米國の千萬長者の感謝は、陶器の花瓶で表はされてゐた。それはアール・ヌーボーの巨大な見本で、これに劣らぬ大きな木彫の臺座が、階段の角で、それを支へてゐた。古代の玻璃は、その住居の沈黙を、温かい軟かな光で浴させてをり、そして、この住居は、その誇りを物語る者によつて永久に打棄てられてゐるのだつた。階段の空になつて物を言はなくなつてゐた鳥籠は、尙更、私の寂しさを増すものだつた。私は墓場、しかも、オルテグ先生の既に亡くなられてゐる時の墓場を訪ふ時の物の感じの如きものを有つた。けれども、誰かが生きてをり、また生きてゐる筈であつて、氣の毒な夫人も、凱歌を擧げてゐる「時」の幽霊の間を、二階に登つて行かれたのだ。私は、小さいサロンの入口の前に立つた。何とも言へぬ情緒に虐まれながら戸を叩いた。ある聲が私に「お入り」と答へた。それは彼女の聲だつた。

明かに私の間違つてゐなかつた證據になるかのやうに、先刻の先生と同じく、夫人は

分類しかけた手紙に取圍まれて、机に凭つてゐた。次に、彼女は手紙を書くために、その分類の仕事を中止してゐたところだつた。門番に話すつもりで、彼女は單に「ジョゼフか？ あんたは……」と言つて、ペンは依然走りつゞけてゐた。夫人は振返つて、私を見ると聲を立てゝ立ち上り、

「あなたマルサルさん？ 何か起つたの？ 良人が私を呼んで？ 一層悪くなつて？」と叫んだ。

幾日か前から、始めて今日は看護婦の服とは違つた服装をしてゐる彼女を見た。彼女は相變らず美しい昔のオルテীগ夫人だつたが、しかし、どんなにか變つてゐた。苦痛のこの數週間が、彼女の氣高い様子に、もつと細かい、もつと引緊つた、一層骨の出た、残酷な彫刻のやうな趣を出してゐたのである。

「いゝえ、奥様、先生はこちらへ貴女のお出になつたことすら御存知ありません。公證人のメチヴィエーさんと御一緒のところでした。」

「ではあなたは解つたのですか？」

彼女はさう言つた。脊の後に置いた手で、彼女はテーブルに凭りかゝり、頭を首垂れて、少し動かしてゐた。不意を襲はれた驚きが一度過ぎ去ると、私のゐることも、もはや彼女を愕かさなかつた。何うして、何故、私はエタ・ジュニの廣場に來たのか、彼女はそれさへ尋ねなかつた。私は其處に立つてゐるやうで。私は覺めた夢の中にて、其處に彼女が悶えてをり、眼を据ゑ口を開いた儘言ふのであつた。

「さうよ、明日なの。約束したけれど勇氣が足りなくなつたの……。」

彼女は低い聲で、自分だけに向つてゐるかのやうに言つて、それから、こちらの顔を見て、

「マルサルさん、私主人に話ができませんでした。面と向つて馬鹿にされるのをきいてゐられないでせう。ですから……。」

彼女は振返つて、戦く手で、私の入つた時書きやめた紙を見せ、

「此處に私の言へないことを書きましたの。この紙片をごらん下さい。マルサルさん、見て下さい……。」

夫人は全く力が抜けたやうに、椅子に凭りかゝつて、徐かに手を机の上に伸ばし、頭を腕にのせて、もはや一言も洩すことはしないで泣き出したのだつた。私はその紙片を手に取つて讀んだ。

X X X

「私は眞實にあの人を愛することが、取りも直さず私の一生であり、私の一切だと信じました。私はそれをあの人に言ひました。でも、それは眞實のことではありませんでした。」

若しあの人死ねば、私はあの人と一緒に死ぬのが自然で、避けられないことだともひきました。あの人を奪られては、私もないものと想ひました。それは私から魂が奪られることでした。私はあの人失くなる辛さを想像できませんでした。それはむごたらしくて、私には考へられないことでした。私があの人と別れた時の空虚、生命のない、光のない眼、血が空になつた私の心臓を想像しました。それ程私の中に、あの方は入つてゐたのでした。そんなに私を支配してゐたのでした。その聲、目つき、精神が、私に

浸みこんでゐました。實に私を新しい生命のものとしてゐたのです。あれ程熱く、光に満ち、輝いてゐる眼、——そのほろ苦い聲は、知慧と情愛との言葉其物のやうでした。——疲れを知らぬ精神の大膽さは、信賴に酔つてゐる私を何處へと言はず運び去つてゐるのでした——とにかく、そんなことより他に何一つなかつたのでした。私はあなたの印象か、反映かに過ぎなかつたのです。大抵の女の方のやうに、あなたの非常に愛して下すつた顔や手足のことを考へたことはありません。私が目を閉じた時、あなたの眼が瞼の下で輝き、私を所有してゐたのです。ミシエル！ ミシエルさん、私どもの愛は綻びるものでせうか。今の私はあなたが恐いのです。いひ知れない苦痛と、耻とに、私は悩んでゐます。日々、刻々、あなたは私から遁げていらつしやるやうに想ひます。あなたは私から引揚げ、私の生活は離れて改造されつゝあります。私はあなたでない物を欲してゐます。私は非常に歩み心地のよい空氣と、光と、空間を欲してゐます。私は戦争してゐる民衆の熱に、心を一つにしたい望みです。負傷した人々に善いこととして、感謝の言葉を欲しいのです。あなたがなくても、そんなことを私は欲しいのです。

ミシエル！ でも私はあの人に話をするのは控へます。どんなにか、あの人は蔑すむこととせう！ 危険の中で、苦痛の中で、迎もあの人は、私を打棄てることがあるでせうか。

で、若し私の方が生きてゐれば、私はあの人を棄てることになりませう……。滅入るやうな怖しい道を、あの人は刻々に進んでゐるのです。進まねばならぬのです。可哀さうな人は、立停まる事ができません。私の他にはこの世に、あの人と足を揃へ、墓場の中に入つても、傍で寝て、あの人を救ひ得る人はありません。

あゝ！ ミシエル私にはできないわ！ あんまり約束し過ぎたのよ。赦して頂戴！ 強ひてと仰しやれば、棺の中で私たちの體を結びもいたします。ですが、魂は死ぬ前に解かれることとせう。試煉は迎も怖いことで、私を毀して了ひます。私の戀を干切つてしまひます。私を生かして置いて下さい。干切られても、切りさいなまれても、私は生きてゐたいのです。お蔭で知つた豪華な幾年かの後に、今度は何時も惨めな者だらうとは、よく存じてゐます。あゝ！ 若しあなたと一緒にあの世の關を越えたいやうでした

ら、天なり地獄なりで、私達の戀を續けられるのでしたら、それはいいのですけれど！ でも、死ではそれこそ萬事の終りです。ミシエル、後生だから、あなたの好きだつた花を、遺して置いて頂戴……………」

突然中斷されたこの文は、療學のやうなものでもつて完結させられてゐるのだつた。其の處インキはまだ全く乾き切つてはゐなかつた。一生に二度と、私は内心の傷からこれ以上に血の滴る魂を見、それに觸れたことの、これ程の感じをもつことはあるまい。



私はこんな事にほろりとして、愚圖々々してゐる時間はなかつた。私は數週間も前から、探し求めてゐたところの、オルテグ先生に働きかける唯一の方法となるものを手に持つたのだ。この瀕死の叫びを、先生といへども納得されるだらう。しかも、急速に病氣と毒と絶望とで、先生の人格は甚く變つてゐても、減じてゐても、感じがあまりに大きいので、瀕死の魂の、この歎願を外に見すごされることはあるまい。私はオルテグ夫人の様子を見た。彼女は腕と頭と上半身をテーブルに押しつぶしたやうにして、引續き泣いてゐるのであつた。そのテーブルで彼女はこの痛々しい懺悔を書いたのだ。彼女は、もはや、私を見てゐなかつた。彼女はもはや、私がそこにゐることも、何處に自分があるかも知らなかつた。彼女を慰めようとしたところで、何の用に立つものであらうか。必要なのは彼女を救ふことだつた。私は足音を殺しながら、その小さいサロンか

ら出た。次に私のあはれな足が許すだけの早さで、階段を急ぎ、家を出て、タクシーに乗つた。私は運轉手にサン・ギョーム街の名宛を告げた。オルテグ夫人が我に歸つて、彼女の救ひの、この紙を取返しに追駈けて來はしないかと、私は震へてゐた。若しか別の車が私の車を追つてゐはしないかと、絶えず窓から窺ひながら、腸を掻きむしられるやうな文面を、途切れ途切れに讀み直した。しかし、追ひかけて來るものはなかつた。一まづ療養所に着いて、運轉手に賃金を拂つてゐる間に、サン・ギョーム街に人のゐないことを確かめた。オルテグ夫人は、少くとも直には私を追うて來なかつたのだ。私は十分自由の行動がとれた。

私は中庭でメチヴィエー氏に遭つた。勿體ぶつた公證人は、先程まで事務室にゐたのだが、遠くから愛嬌よく私を迎へて、先方から近づいて來た。彼は有名な得意の先生と會話をして、非常に驚いてゐた。彼は職業上の慎重さに背きはせぬかとばかりの調子で、その事を語つた。

「マルサル博士さん、貴下に出會つて仕合せです。どんなにオルテグ先生が貴下を愛

されてゐるか分ります。唯今、その證據を與へられたところです。」

その後、氣の毒な先生の遺言書で、私はその謎が解つた。先生は愛情から、惜氣もなく、夫人の死後には療養所を私に遺贈するといふのであつた。メチヴィエー氏は續いて言つた。

「で、貴下も先生を大變愛してゐるのですね？」

「勿論です。」

「それでは先生を監視なさいよ。先生が運命的の決心を覺悟してゐられても驚きはしませんがね。教誨師さんにも警告して置くべきだと想ひました。と申すのは、御承知ですが、私は堅固な頭腦を有つてゐませんでね。私は罪のない信仰者でして、天國で誠實なお客様達、殊にオルテグ先生のやうな、學問の名譽となる方々に、お目にかゝることのできる方が嬉しいですよ。」

私はすつかり不安に襲はれてゐたが、同じ思想が色んな人の頭に映じて、如何に矛盾した姿になるものかといふ事に感歎した。巴里の立派な公證人の目から見ると、あの世

といふのは、取りも直さず、財産のある人のためにあるもので——それを彼は善人と混同して——大きな資産が引續いてあるものだとしてゐた。この死後快適の樂園の夢は、ブルターニュのル・ガリックのいふ苦業の宗教とは、凡そ似もつかないものであることは、素晴らしいブルジョアが、われらの士官と似てゐないのと同様だつた。しかし、かなり月並な、この樂天主義から、メチヴィエー氏は精神世界のあることを認めてゐた。オルテグ先生の悲觀説に裏切られて、心にもなくそれを信じてゐる。先生の熱狂、熱情的癡癡、虚無主義の熱、虚無の中に落ちることゝ想つてゐるところの、死に向つての絶望のこと、先生の無闇に腹の立つことは、取りも直さずプロクルストの寢臺の上で、斬られた手足から滴る血なのだ。先生の教理は靈魂を切りさいなんでゐたのだ。すべてそんな考が遠くから迫つて來た。その時には、私は唯一つの考しかなかつた。「メチヴィエー氏はクールモン師に語つたのだ。教父さんがもうオルテグ先生に話してゐないかと、また先生があまり苛々してゐないやうだつたら！もしできれば先手を打たう。」さう想つて、私は事務室へ急いだ。その時、殆ど戸口のところで、廊下の曲り角で、私

はばつたり教父さんと出遭つた。(註、プロクルストはギリシア傳説の道刺で金銀の強奪で満足せず寝臺の上を寝せて寸が餘ると手でも足でも切り足らねば脚をつけて引伸す。)

「貴下は院長を探してゐるんでせう？　先生はル・ガリックさんの室です。私はオルテীগ夫人を探してゐます。」

教父は直ぐさま私にかう言つた。

「私は奥様と別れて來た所です。先生は奥様を心配しておいでですか？」

教父は答へた。

「心配してゐられるからです！　今先生は變な風でル・ガリックさんの室に入られたところですよ。もう自分の辨へもありません。飛んでもない場面を私どもに見せられます。一寸のことで夫人の御不在を私どもの責任にされるのです。だから、私は探して來ると申しました。私は先生を椅子に無理に坐らせました。あゝ！　大變な病人です！　神様は非常に寛大で朗かにしてゐられた後に、時々こんな手荒なことをされるものです。で、肉體は何でもないですがね、魂が！……」

「教父さん一寸お尋ねしますが、公證人が先生の代りに心配なことを話したでせう。あ

れは知つてゐます。あの人は、氣の毒な先生が自殺の考を有つてゐられはしないかと、

震へてゐましたが、その事をオルテীগ先生に仰しやいましたか？」

「いゝえ、ですが、その話で、一番近い親類の方ですから、ル・ガリックさんにその話をしに二階に上つた程、強い印象を受けましたね。」

「メチヴィエーさんの考をル・ガリックさんに通じたのですか？」

「あの方はもう同じ考を有つてゐられました。」

私は叫んだ。

「多分二人は今その話をしてゐるのでせう。どんな事を互に話し合つてゐられるますか。教父さん、二人の側へ行かして下さい。しかし、一人で。その方が惻口です。私は奥様の不在について先生を安心させませう。夫人は散歩に出られたのです。で、もし従弟の方と先生との間に議論があつたら、私は十分權威をもつて干渉いたします。あなたの服装だけでもオルテীগ先生は酷く立腹される危険があります。」

クールモン師は答へた。

「博士御自由になさい。ル・ガリックさんがゐられれば、宗教の方から申しまして、私は無駄です。私は聖書の説教をしますが、あの方は私以上です。聖書の生活をし、またその苦しみをしてゐられます。オルテグ先生が、この偉大な靈を通して、宗教の眞理が解らないのでしたら、それは私ども神學者の申すやうに、先生は無敵の無知だからです。才智ある人の箴言がそれを教へてゐます。神は與へた人にも要求されるのです。それに、院長が慈悲の心で診てやられた可愛相な人達が、あの人のために祈ることでせう。その事はメチヴィエーさんに話しました。あの方の返事を想像して下さい。それこそ最も確かな謝禮だとのことでした。えゝ！それはフランソア・ド・サールの言葉ではありませんが、ブルジョアの人としては、あまり悪い方ではありません。ですが、引止めてすみません……。行つていらつしやい、行つていらつしやい……。」

## 二六

オルテグ先生は、士官の寢臺の枕許にゐられた。ル・ガリックの臉は眠つてゐるかのやうに、眼の上に垂れ下がつてゐた。これと異つて、相手の不安さうな瞳は、怒りを放つてゐた。二人とも黙つてゐた。ル・ガリックは、物をいふことさへ控へてゐた。屹度、従姉の良人の明かな、正しいとはいへぬ嫉妬から起きた、善くない心を感じることが、身に對して呵責してゐたのだらう。オルテグ先生は、息をしないで黙つてゐた。先生は妻の心の中の敵を考へた青年に、心の殉教者らしいところを發見できなかったのであつた。その過ぎつゝあつた運命の期限を、突然翌日と決定した怖い危機を、負けぬ氣がかくすことを命じてゐたのだ。己が愛する女が、囁言にまでも、精神的に自分から遁げて行くのを見るので苦しめられ、疑念の熱に酷い目に會ひ、それといふのも、事實の上でなく、感情の上のことであつては、鎮めることも不可能なので、先生は絶望

の賭を企て、見ようと望んだのだ。妻が彼を常に愛してゐて、心中の契約が保たれるのか、それとも、もはや彼先生を愛しなくなり、彼女が尻ごみするのか、叶ふならば先生はそれを知りたいのだ！ 彼女は尻ごみしたことはなかつた。また先生はそれを知らなかつたのだ。また一つの疑ひは、躊躇することなく、夫人によつて口にされた承知の諾から起つたことであつた。しかし、彼女は何物かに促されて、それで實行ができるものであらうか？ 彼女は愛によつて、もしくは名譽にかけて先生と一緒に、死なうとしたのであるか？ この痛ましい疑問が、オルテグ先生に對して起きたのだつた。その間は、先生にとつては、堪へられないことであつた。何故か、夫人の不在になつたことが、謎を二重にして、怒りと、また多分後悔の念を激しくして了つたのだ。あんなに獻身誠實であつた者に、押しつけて勸告をするのでは、實に殘忍である。あれ程高尚く、寛容であつた昔のオルテグ先生は、今日の迷つたオルテグ先生に、その殘酷さを責めてゐられたのだ。それとまた、この殆ど獸的感情の露出と、ル・ガリックがこの瞬間にすら、殿しい辱めの例を、この狂人に與へた克己とは何たる對照だつたらう。この性格の

優れてゐることは、一種の凌辱であつて、この士官に對して今持つてゐる感情では、オルテグ先生がこれも我慢のできないことだつた。夫人がル・ガリックを愛するかも知れないことは、恐怖し心配してゐることだつた。先生は尙それを疑つてゐた。先生はル・ガリックが夫人を愛したかも知れないことは疑つてゐなかつた。眞底既にそれは氣づいてゐたか、または疾くにその事を知つてゐられたのである。妻の從弟に對して、久しく示してゐられた、人の好きさうな、嘲けるやうな同情は、年長者が、好きな青年に對して感ずる喜びの一形式で、私共の自負心の、新鮮な抑へ切れない愛撫だつた。その好きな青年を絶対に信じなくなれた時から、逆の方向の反動が生じてゐた。ル・ガリックが從姉に對して、熱情を抑へゐることは、凱歌を擧げた先生を満足さすものであつた。それが瀕死の境にある人では却て苛々し、腹も立つのであつた。尙私の注目したのは、先生は彼を憎んでゐたことだつた。

この反省し熟考することは、今日私の胸の中に繰り展げられる。その時には、それを電火の一閃の中に悉く認めたのであつた。痲痺の初期陶醉のやうな、多くの患者が示し

てくれる精神的同時性の現象によつてであつた。人の一生の、悉くの詳細が浮上つて來るのが見え、一瞥で何年も連続を捉へられるものである。しかし、エーテルや、クロロホルムの吸入は、一瞬間しか續かないのだ。

入口の闕から、私はル・ガリックに言つた。

「中尉殿、御免下さい。私は院長に特にお話したいのですが。」

私は自分でも、わが聲が少しく震へてゐることが解つた。きつと私の顔色が變つてゐたらう。その昂奮の色は、オルテীগ先生にも氣づかずにはゐなかつた。いきなり先生は訊ねたのであつた。

「家内のことかね？　何うしたんだ？　何が起つたんだ？」

その聲は矢張り息苦しさうであつた。その眼には、はつきり浮んで來る怖い影像が讀めた。氣の狂つた犠牲の彼女が、規定時間よりも早く自殺したと想へたらしかつた。

「御安心下さい、先生、何でもありません。奥様とは別れてまゐりました。」

「では、彼女も歸つたのか？　僕が尋ねてゐることは解つてゐる筈だ。何故一緒に來な

いのか？」

「しかし、歸つてゐらつしやらないからです。」

「今別れて來たと言つたらう。何處へ置いて來たのだ？」

「エタ・ジュニ廣場のお宅に。」

「エタ・ジュニの廣場にゐるのか？　君を呼びによこしたのか？」

「お呼びはなさいません。先生、私自身がまゐりましたのです。」

「何うして其處にゐることを知つたのか？」

「私は想像しました。」

「どんな徴候でか？　何故君は探したのか？」

「兄さん、マルサル博士が夫人を心配したからでせう。あなたに控へて云はないのだと、

僕はさう察します。」

今度、中に入つたのはル・ガリックであつた。療養所に來てから、始めて權威のある語調が、何時もの非常にあきらめた、解説したその聲の中に響いてゐた。彼は、つけ足

して言つた。

「さうだ、今朝彼女が見舞ひに來た時から、僕も彼女を心配してゐたんです。」

「では君に話したかね？」

と、オルテীগ先生は前に乗りかゝつて言はれた。先生は私を見、ル・ガリックを見、次に私達二人を見廻したのだつた。

「僕の周囲で陰謀をするとは怪しからん？」

次にル・ガリックだけに激しく、

「何か家内が言つたか？」

「何も。しかし、迎も酷い苦痛に取りつかれ、藻掻いてゐる人のやうに、非常に心配し、煩悶してゐるのを見受けました。その苦悶の動機を知ることが既に恐しいんです。」

「でも、話してくれ、話して呉れ！」

先生は更に一層荒く、強く言ひ張つた。ル・ガリックは、目に見える程の努力をして答へた。

「これは甚だ重大なことです。しかし、兄さん、若しカトリーヌの母がゐれば、それともその母がゐらないで、次に一番近い血筋の叔母がゐれば、お願して質問を一つして貰ひます。その人々がゐないので、僕が血筋の唯一の代表者と想ふので、質問を出すからつて立腹しないで下さい。ほんとに僕の心配は、——そして僕一人にあることではありません——實際、カトリーヌがあなたから受けた一番残酷な心痛のことについてです。兄さん、あなた方は自殺しようなどは考へてゐないと誓つて下さい。」

こんな質問を、この際こんな人物に話しかけたのを聴いてゐて、私は戦慄とした。尙一層先生が、齒を喰ひしぼり、眼を光らせ、眩掛の上で両手を組んで聴いてゐる姿を見てさうであつた。嫉妬とモルヒネとの二重の影響下で、あはれなこの人は、私どもの前で、氣が眞に狂つたのであつた。さうでなければ、明かに承諾のできない質問に對して、更に一層承諾のできない、それも看病を委ねられてゐる患者の室で、取返しのかぬ感情問題を惹起す原因ともなるか知れない、別の質問によつて、迎もこの質問に返事はできないうでせう。殊にこの青年に對し、道徳的に下に墮ちた状態になるやうな告白で、

話を続けられるものであつたらうか。先生は言ひかへした。

「名譽に關する質問の遣り取りをしてゐるのだから、エルネスト、君自身が僕の質問に答へてくれるから返事をするよ。成程、オルテグ夫人の實家の代表として、僕の家庭に嘴を容れようとするのだね？　さればだ。今度は、君が僕の家内に戀をしてゐないと誓つて貰ひたいね。」

意外のことゝ腹の立つたことで、起き上つたル・ガリックは叫んだ。

「兄さん！」

彼は繰りかへした。

「兄さん！」

「ははあ！　君、その返事ができないんだね。できない筈だよ！　では、戀をしてるんだね！」

オルテグ先生は残酷にも凱歌をあげるやうに、凄い笑ひの爆發の裡につゞけていふのだつた。

ル・ガリックは三度目に、しかも、何といふ變つた調子で言つたことだらう！

「兄さん！」

「君は戀をしてるんだ！」

と、相手は全く我を忘れての返事である。

「僕が知つたのは、今日のことではないよ。ね、疾くからのことだよ。今昔の差はある。昔の君は何も希望をもつてゐなかつた。君を大人だつた僕にくらべて、子供だと感じてゐた。……大人だつた僕にくらべて！（彼は繰返していった。）君が、彼女が自由になつたら！　と言ひだしたのは、二箇月前、此處へ訪問してからだ。——僕は君の思想の中の、ある醜惡なるものを讀んだのだ。それから君は負傷したのだ。彼女に會ひに、此處へ後送されたのだ。僕は君が助かるだらうと信じた通りを言つた。僕とは違つて……。僕の死ぬことは、君が醫者である必要はないのだ。それで……。僕が解るかね。家内は君を愛してゐない。僕をこそ愛してゐるのだ。で、僕と一緒に、永久にこの世を去るのだ。家内がそれを言ひ出したので、僕は承諾したのだ。君には彼女は取れないのだ。」



僕が番をしてゐる……。あゝ！ ほんとか！ 僕に向つて、彼女を護るといふのかね？ 彼女が歸つたら、此處へ来るやうに頼むんだね。僕が自殺すると話してもいい。君に言つたことだ。僕と一緒に彼女が死にたいといふこともね。僕達は一緒に契約をしたのだ。彼女の考を變へて見るんだね。君にそれを許すよ。今、彼女がゐないので驚いた時、僕は頭を何うかしたが、彼女はエタ・ジュニの廣場へ行つたのだ。今朝、僕が此處でしたことを、旅行に出るやうに、一切の整理をするためにだ……。それは言はゞ旅行だ。しかし歸ることはないのだ……。唯君は彼女を愛してゐたんだし、何時も僕は君に親切だつたんだから、エルネスト、僕等の最後の時間を亂しに、君は此處へ來ない方が良かったんだ。」

「兄さん、僕が此處へ來たのではありません。頼みもしないのに、人が此處へ後送して來たのです。今迄いふ機會が無かつたのですが、それを遺憾に念つてゐました。」

そして、私を振り返り、

「マルサル博士、その十字架を取つて下さるんですか。」

彼は壁に掛けて、常に目の前にあるやうにしてゐた象牙の、近代ものらしい極質素なキリストの十字架を指した。私はそれを取つて渡した。彼の両手は組合せられ、その小さい十字架の柄を握つた。彼は徐かにそれを唇に運び、足に刺してある釘を接吻して言つた。

「博士、ありがたう。貴下が其處にゐて下さつて、これから私がミシエルにする誓ひの場に立會つていたゞいたことは嬉しいのです。」

今度はオルテグ教授に向つて、兄弟らしい呼びかたで話を始め、意外の物優しさは、立腹してゐた先生を吃驚させ、先生も頭を擡げたのであつた。

「ミシエル、救世主のこの御像にかけて誓ひます。僕は一生あなたが聞き得ない唯一口の言葉もカトリックに話したことはありません。彼女が他日自由になり、僕の妻になれるかも知れぬといふ考が、よし僕の頭に起つたことがあつたとしましても、その考は心からのものではなく、生きてゐられるあなたに對し、罪の誘惑として逐ひ拂つてゐたことを誓ひます。最初の聖體拜領の時のこのキリストこそ僕の證人です。僕はこの方に、

それに抵抗の力をお願ひし、それを授かりました。以前、僕はカトリーヌが幸福になる力の來ること願ひました。その時の幸福は、あなたから生れて來ました。で、僕は彼女を熱心に愛しました。と申すのは、彼女を熱心に心から愛したからでした。さうです。彼女があなたによつて、この世で幸福になることを祈りました。で死んだ時も、僕の信じてゐるあの世で、彼女が幸福であるやう犠牲を獻げるでせう。そして、ミシェル、今こそ、あなたが彼女を愛する餘り、犯させようとしてゐる行爲を御覽なさい。あなたは、彼女と一緒に自殺しようとして出たと仰しやる。その申出は、あなたが承諾されてはならぬものです。僕達は、もはや、言葉の遠慮をなすべきではありません。あなたが彼女を犠牲にするのは、悪むべき利己主義からです。あなた此世の生活しか信じられない。あなたと一緒にすることができないからと言つて、彼女のまだもち得る喜びを、此世から奪ひ去らうとなさるのです。それにこの生命のことです！ 千に一つ、萬に一つ、百萬に一つのチャンスしか無い時、あなたはわが爲にその唯一つのチャンスを冒して行く権利があります。あなたはかう言ふことができます。自分は死ぬ、危険を冒す。死こそ

虚無だ。神があり、己が罰せられても、他人のことでは無いし。さうかも知れません。しかしです。死が虚無であつても、それを斷言することはできません。それは、あなたの心の中の一つの考にしか過ぎません。

それは實驗ではありません。實驗しか認めない貴下です。僕はあなたに申します。あなたは怖しい罰の前に進んで行かれるのです。行らつしやい。しかし、誰も他の者を伴れて行くべきではありません。若し貴下が自殺を決心なすつても、一緒に、その神祕の中に、自分の愛する者と言はれる者の、その自殺の重荷をまでも運んでお出でになるのはありません。その美しい魂を亡ぼすことをなすつてはいけません。」

この長い熱烈な言葉の努力に、彼は疲れ果て、更に寢臺の上に横になつた。彼は低聲で言つた。

「何も彼も廻る、何も彼も、あゝどんなに辛いことだらう！」

病人の生きてゐる者らしい嘆きの言葉が、俄に宣言と誓ひとの高尚な神祕の言葉の次に出たので、私は我に歸り、現實の地位を意識したのであつた。そして彼が、

「何でもない。眩暈が起つたのだ。」

と附け足したので、私はオルテグ先生に言つた。

「先生、まゐりませう。ル・ガリックさんを休ませてあげませう。」

先生は起ち上つた。一足戸の方に歩いて、それから振返つて、

「僕も行く。だが、彼と君との前で、マルサル君、家内を全く自由に任かすことを斷言してから行くよ。僕は放任する。僕の最後の決定日に、跟いて來ようとも、跟いて來まいとも、勝手にさすよ。君は立派な人間だ、エルネスト君。だが、僕も同じくさうだと意識してゐるよ。」

「ルナールを捜しに走つてくれ。」

と、オルテグ先生は、部屋を出、戸を私が締めるや否や、直ぐに私に言つた。

「あの男をル・ガリックの側に控へてゐさせてくれ。あの眩暈が何でもなくてあればいゝが、頭にあの傷だから、時には馬鹿げた脅かしや、陰性の中毒が根抵になることがあるのだ。そして深部に移つたらね！ 要するに、彼を見張つてゐることが賢明なことだ。疾くね、そして事務室へ來てくれたまへ。」

學生を見つけ、必要な訓示を授けて、負傷患者の側へ伴れて行つた時間があつた後に、私は再び事務室の戸を叩いた。嫉妬の狂亂は、まだ全くは過ぎ去つてゐなかつた。オルテグ先生は、調査を仕直さうとしてゐた。私を待つ間に、先生は書類の整理に再び着手してゐたのだ。私は自動的の機制が、危篤の際にも激しくもあるけれど、それだけに

一層機械的に働くものであることを認めたことが毎度ある。それは高級心象の混乱を補ふために、われらの低級心象内で、平衡を維持させる大自然の一つの防禦方法ではないだらうか。全部が顛覆すると、早速死なり、精神錯乱になるのであつた。手袋を嵌めた先生の手は、分類を續けてゐた。その間にも私を訊問してゐた。

「マルサル君、何故エタ・ジュニ廣場へ行つたんだ？」

「先生、私は一切を知つてゐましたからです。」

私はその時一切の告白をした。夫人と戸の背後で話した話、夫人から要求された沈黙のこと、その時からの私の感情、どんなにか先生が怖い計畫を、自分から進んで断念されることを望んだかといふこと、數時間で最後の臨牀記録を作ることを急がれた時の私の覺醒、私の疑念の段々大きくなつたこと、公證人の來訪とオルテグ夫人の不在のこと等々……さうして、私は結論を下した。

「私は思ひました。事件が眞實なら、彼女は在宅の筈だ。唯私は單純に行きました。私は誰とも相談しませんでした。先生の周圍に陰謀はございません。決してありませんで

した。」

「陰謀はないのか？　そしてその沈黙は彼女の要求か？　さう言つたね。」

先生はかう叫ぶのだつた。それから無量の苦々しさで、

「何といふ人間は寂しいものだ！」

私の反對を止めて、更に訊問口調で、

「では、君がエタ・ジュニ廣場に着いた時、彼女はゐたかね？」

「左様、上の小さいサロンにゐらして、執筆していらつしやいました。」

「僕への手紙を君に渡したのか？　寄こしなさい、お寄こし……。」

「先生、執筆してゐらしたのは手紙ではありません。先生にといつて、何もお渡しになりませんでした。」

「しかし、結局君は話したんだ。君は質ねたのだ。彼女は君に返事をしたのだ。君は別れて、此處へ歸り、僕を捜したのだ。さうか、それともさうでないのか。僕宛の使を言ひつかつたのか。どれだ？　それを知りたい。」

「奥様から何も言ひつきりません。二言三言いはれるや否や、奥様は泣崩れてお了ひになりまして。その時大不幸が起つたかのやうに、奥様はある言葉を紙の上に走り書きなさいました。奥様はそれを私にお見せになつたのです。それは奥様が口でお言ひになれなかつたからのことでした。その紙を読みまして、それをもつて私は逃げ、先生に持つてまゐりました。ですが、も一度申しますが、奥様がそれをお送りになつたのではありません。奥様はお元氣があれば返せと仰しやつたかも知れません。奥様はお元氣がなかつたのでした。其處には、唯一つの叫び、奥様のお叫びがあつただけで、先生のお聞きにならなければならぬものでした。」

私はポケットからその紙片を引出した。オルテグ先生は、両手で引たくつて取られ、荒々しく、

「たうとう解るのだ。」

と言ひつつ読み始められた。

重大な刑の執行について怖しく好奇心をもつといふことが、私の生涯中に起つたのだ

つた。私はその場にあつたので、立會つたのではない。斷頭の刃の落下するのも、首の飛ぶのも見たのでもない。私にはそんな事はできなかつた。私の眼はその刹那に閉ぢられた。一種のそれに似たやうな恐怖が、夫人によつて書かれた絶望の頁を読むオルテグ先生の前で襲うた。私は視線を外らせた。先生にその打撃をもたらすことを、敢てしなければならなかつた。先生がそれを受けられてゐる間、先生を見ることはできなかつた。私は悪かつた。多くの他の人の後に、並外れた偉い人が、私に與へる最後の教訓を失つていゝことはちつともなかつた。それは己を審き、己を罪し、また高尚な反動から、理知により否定されてゐる、纏つた全實在を、肯定する大きな心の教訓だ。さうだ。ほんとに、誰も知る「心は道理あれども理性は知らず」の言葉に、註解をしさうな悲壯な人だつた。その絶對的の決定論者が、ある我行爲を批難しつゝ、——その人は曾て知らなかつたのだ。——感謝と自由とを認めたのだ。思想感情は、出來事に過ぎないとする、この現象論者が、——この人は嘗てそれを解してゐなかつた——人が人に對して成さねばならなかつた尊敬を宣言したのだつた。精神世界の否定論者が、悼ましい肉の重壓に

も拘らず、長い間の中毒の奴隷になつてゐたにもかゝらず、その瞬間には、専らそれで動いてゐるのであつた。

私は、先生の方から、ある反抗、ある怒り、今ル・ガリツクの枕許で見たばかりの光景のやうな、無法を示されるものと期待してゐた。私は自失したやうになつて、非常に沈着に、私に語られるのを聴いてゐた。そこには無我の、肉體を離れたともいひたいやうな、優しめしいやうであつた。といふのは、それは確かに墓の彼方からの、非常に感激させ、想ひ起させられる聲だつたからだ。その眞の遺言をし、私にそれを記録させたいと思はれた點で、私は筆を止めずにはゐられない。私のペンは掌の中で震へてゐる。先生は同じストア哲學の理知主義の調子で話し始められた。それは同じ部屋で、病の診断を私にさせられた時のものであつた。

「マルサル君、僕の一生を通して、事實だけしか信じなかつたといふことは、かなり理由のあることだつたらう？　事實が、どんなにか人の足を地につけさすものかねえ！　何週間か前から、僕は不安定と想像の中で、荒れ狂つてゐたのだ。僕は知らなかつたの

だ。今こそ解る。僕は救はれたのだ。君が可哀相な家内と僕との話を聞いてくれ、一切を理解してくれたからだ。僕は彼女の愛を疑つてゐた。彼女はその證據を見せたいと思つてゐたんだ。僕はといへば、そこに事實を見たいと念じてゐたのだ。それも一つだが、僕の見て來たものではなかつた。それは殊勝な心からの、この上もない憐れみの飛び出したものだつた。戀愛ではなかつた。それで尙僕は疑つた。そして疑ひのせいで、ある罪、さうだ、ある罪を犯した。心中の申出を承諾したからではない。それならば責任はない。戀愛の申出なら、承諾する権利がある。蜚蜚のやうな我々には殆ど錯覚かも知れんが、悪いことはそれこそ苦痛だ。善いことは取りも直さず幸福だ。殊に戀愛だ。——それによつて銘々人間が限界を超えることができ、他の者と融合することもでき、それによつて宇宙と一致することもできるのだ。ね、マルサル君、理知は年ごとにでき、書き取る間もない。戀愛は、これは利那的の、しかし、充實豊富の所有だ。人間永久の間だ。それを與へる者と別れることはできない。それは人間の眼の瞳だ。骨の髓だ。汲みつくすことのできない充足した寶だ。で、それを欲しても、また互に愛し合つても死

ぬ時に死ぬのは、自然だし、極めて正當のことだ。いや、僕は家内に「有り難う」といつて、申出を承諾したことをわが身に責めはしない。僕の罪は、彼女が愛でもつて愛してくれてはゐないことを感じながら、約束の履行を要求したことだ。それは何故か。それは感じたいためだ。それこそ、ね、君、怖いことだ。憎むべきことだ。その死を承諾し、その助力もし、愛しながら一緒に世を去るならば、それこそ人間幸福の最高歡喜だ。僕が危険を冒したやうなことを冒し、僕の爲にする憐れみから、そして彼女を不信用の裡から無理に虚偽の中に陥らせて、自殺をさせるのだつたら、それこそ殺害するも同然だ。」

私は突込んで言つた。

「では、先生理詰めになすつて下さるですね。一緒に死ぬお考はおやめですね……。」

「さうすると、君は僕が解らんかね？」

と、先生は遮ぎられた。

「解りました。先生、正しく解りましたから申しあげるので。愚かな約束から奥様を

解放しておあげになる以上にして下さい。お出来になるのですから、道徳的の健全の中に、御自身お入りになつて、奥様にもさうなさるやう手傳つておあげ下さい。」

「僕の患者の、ル・ガリツクに、その醫者の僕がした嫉妬の場面のことを君は思ひ出すだらうね。苦々しい残念なことだつたとおもつてくれ。僕は狂人だつた……。」

「ル・ガリツクさんのことではなく、御自身のことですが、肉體のお悪い先生のやうな患者は、しかも、精神が健全な状態ですから、自分の治療をする筈だつたのではございませんか。」

「それがよく承知の通り、無いのだ。」

「ある所置があります。それを御自身の診断と同じ診断をなさいます患者には、早速忠告もなされば、命じもなさるでせう。」

「手術か？」

肩を窄めて訊された。

「さうです。手術です。一度お話しになりましたね。以後それは遠慮するやうのお言葉

でしたから、控へてゐましたが、今日ならば何でも試みますね。何と申しても効果はございませう。デイウラフオア先生の腫臓痛に關する二つの講義と、その手術のお蔭で、完全に數箇月以上の健康を得たポルトガル人の話を覚えていらつしやいませう。診察の相談をなすつて、先生達——御自由に選び出して下さつて——が手術をしなければならぬといふ御意見でしたら、手術をさせて下さいませうか？」

「僕はもう何も言はん。何故、ほんとに言はないかといふのかね？ だつて、もつと急ぐ仕事があるよ。マルサル君、可哀さうな家内を安心させることだ。今のところ、彼女が過しつゝある苦悶を考へるがね。彼女は歸つて來ないのだ。探しに君往つてくれんといかん。僕より前に、君が會つて話す方がいゝよ。僕も直ぐだ。それに感情の大變な衝撃で、僕には不可能だらう……。マルサル君、僕等はうつかりしてゐたかね？ 矢張彼處に彼女がゐるか知ら？」

既に先生は、卓上の自由電話機を取上げて、エタ・ジュニ廣場の門番に、オルテীগ夫人がまだ在宅か何うか、質ねるところであつた。

「まだお出かけになつてゐない!? マルサル君、君電話にかゝつてくれ。彼女を呼んでくれ。小さいサロンには電話がある。君、早速彼女を安心させてくれ。彼女に苦悶を殖やさないでくれ。手紙は既に渡したと言つてね。送る勇氣のなかつた手紙のことだから。僕は落ちついてゐること、待つてゐること、一部始終を君が話す爲に、僕の依頼を受けに行くことを告げてくれたまへ。」

「若し可能だと認められましたら、先生が手術を決心されたといふことも言つて宜しいでせうか？」

「あゝ、何うか。だが、ともかく彼女を安心させることだ。」

私どもがこの若干の言葉を交してゐる間に、門番は通話を邸の内部に移してゐた。返事の聲があつた。聞き覚えのあるオルテীগ夫人のそれだ。

「ゐらつしやいます。」

と、私は先生に言はうとした。見ると、その時先生はもう一つの受話器を取りあげるところだつた。



「彼女に返事のないのは悪いからではないか知ら。と言つても、今更先生を止めることもできない！」

とおもつた。で、大きな聲で、

「奥様ですか。先生にお話しましたよ。お書きになつたものを差上げました。お読みになりました。先生は落ちついてゐるやうにと仰しやいます。奥様をお迎へに行つてくれと仰しやいます。早速まゐります。私どもの話の模様を申し上げます。お喜びでせう……。此處からそちらへ、も一度、御安心遊ばせ……。」

「でも、主人は如何でいらつしやる？」

感激に堪へかねた聲が質ねるのであつた。

「お宜しいです。あれをお読みになりました助かつたつて仰しやいました。お會ひになれば非常にお喜びでせう！」

「も一度、君、話させてくれよ。あの聲を聴きたいから、何故僕が自分で話さないか、説明してくれ。理由をつけてね！」

と、先生は低聲で言はれた。

「奥様、すつと其處にゐらつしやいます？ 先生は奥様が前より静かにしてゐるかつて

お訊きですが。」

「さうよ、さうですよ。でも、先生は？」

「先生は電話に掛りたい思召なんですが、元氣が無いからと仰しやるのです。あまり、昂奮していらつしやるのです。その事や何かで、心配なさいませんやうにといふ思召です。」

「あゝ！ お禮を言つて下さいね。そして、早く来て下さい。」

オルテグ先生は受話器をもとへ架けながら、私に、

「マルサル君、手術中にも、幾度家内を呼んで、今のやうにあれの聲を聴き、幸福に宅にゐて、僕に希望をかけてゐるのを感じに、わざわざ此處の電話に來たことか知れんよ。彼女の一言二言さへ、何といふ清涼劑だつたか知れなかつた。だが、マルサル君、行つて貰はうね。待つ間は數秒も數年だ。そして想ひ出す時は、數年も數秒だ。早く行つて

くれたまへ。どんなにか待ちこがれてゐるだらう。」

それから二十分後に、私はエタ・ジュニの廣場に來てゐた。門前で、オルテীগ夫人は私の到着を窺つてゐた。私の車が廣場の角を曲ると、彼女はガラス窓を透して私を見つ、寄つて來たのだつた。全くそれは別の婦人のやうだつた。その視線を見ただけで、この數時間に、すべて彼女の生活力と謙讓の深い感情が、生けるものの、死の恐怖に凝集したことを明かにせずにはゐられなかつた。先刻まで、不安で狂氣のやうになつてゐた眼から、今は熱い神祕の光が放たれてゐた。彼女は生きようとしてゐた。半ば開いた彼女の口は、貪るやうに解放の空氣を呼吸するものゝやうであつた。停まれと運轉手に呼びかけたと思ふ間に、彼女はサン・ギョームの行先を告げてゐた。彼女は暫く口も利かず徐としてゐた。それから恟々した、まだ最後の怖れが震へてゐるやうな口調で、「で、私に會ひたいのですつて？」

「さうです。御安心のできるやうに、また奥様を支持するやうに、先生が理解をして下さつたことをいひたかつたのです。あゝ！ あれを讀まれた時、おいででしたらと想ひました！」

「私にはできなかつたでせう。あまりにも恥づかしいことだつたでせう。」

「さうではありません、あれをお書きになつた時、奥様は眞實の裡にゐらつしやいました。また眞實の裡であれをお渡しになつたのです。」

「私が約束に背くことを、主人が承諾したからですか？ 卑怯を眞實だなんていふのでせう！ 主人は酷く私を蔑んだでせう。マルサルさん。」

「先生がこんな奥様を愛せられましたことは嘗てありますまい。その證據に、先生は生きる努力を試みようとなさつたのです。御承知の通り、考の上だけだつて、手術を御承知になることはありませんでした。」

「それを主人は承知したのですか？」

「さうです。たしかに奥様が御決心をお變へになつたのでした。」

「手術をね！ ほんとね、何故もつと早く考がつかかなかつたのか知ら？」

夫人は両手を合せていふのであつた。

「何故主人にそのことの話をしなかつたか知ら？ 随分暇つぶしをしてゐたことね！」

私達は悪夢と狂氣の中に過したのね。今では遅すぎはしないか知れないわ？ さうでないでせうか？ あゝ！ 今まで何うしてしなかつたんでせう？ デュフェール事件の時、一切の事を話した時は、まだ元氣がおありだつたのにね。モルヒネ注射をしなかつたら變りもなかつたでせう。毒が體を毀しますはね。また善くなることもあるでせう。暫くの間でも、久しければ尙更のこと、私愛することを止めないで見せてあげたのに。矢張私は女だわ。大きな魂がないわ。主人は私からあまり澤山を期待してゐらしたんだわ。それは私の罪よ。私も、自分にあまり澤山期待してゐたわ。思想に對してのやうだつたわ。私の泣いた時のことを覚えていらしやるでせう。もう考へることも、信ずることも解りません。自分より力の強い、あるものの爲に轉ばされるやうな時があるものよ。大きな浪の下にゐるやうよ。眼をふさいで行く儘にするより他にないわ。」

かやうに彼女は語つてゐた。私は、さも少女しか傍にゐないやうな印象がしてゐた。そして、その弱いことゝ、緊張し切つてゐながらの意志の混乱と、その本能まかせとが、私は好きなところであつた。心の決まらぬ、痛手を負つた、可哀さうなものゝゐることが、女王のやうに、先生を左右するのだと私は確信した。先生はそんなのを可哀さうに想ひ、その憐れみが、矜りと絶望との悪夢を消して了ふのだつたかも知れぬ。悲しいことには！重ねてこの犠牲を見たいのは道理だつたが、遅すぎた。

私どもはサン・ギョーム街に到着した。オルテীগ夫人を内に入れようとして、表の大戸を押した時、邸内の前庭で盛に議論してゐた三人の看護婦が、私どもを見て、同時にその話を止めた。その女たちは道を開いて、怖い目つきで、私と同行の婦人を見送つた。私はこの小さな出来事に注意をしないで、殆ど走つてゐた氣の毒な夫人と、一刻も離れたくないので、看護婦たちに譯を訊ねもしなかつた。入口の廊下の呈してゐる光景は、あまり異常のものであつたので、彼女は直ぐさま「一體何事なの？」と問ひ訊した

のであつた。其處には負傷者、看護婦、見舞客がゐて、突然の變事の周圍に起る當惑した昂奮で、互に話し合つてゐた。この人々も返答をしないで道をひらいた。夫人は走りつゞけて、先生の部屋に續く控室の前に達した。夫人はその部屋から現れたケノー博士に打突かつた。すると、博士は夫人を抑へて言つた。

「お入りくださいませぬ、奥様。先生は今昏倒なすつたのです。ルナール君が介抱してゐます。いまに正氣ならませう。でも、入ることはやめて下さらんと……。マルサル博士、奥様のお入りをお止めして下さい。」

夫人は鋭い叫びを立てた。

「お亡くなりだ！」

そしてケノーと私とを逆もの力で押し除けて、夫人は室内に飛び込んだのであつた。

オルテীগ先生は、長椅子の上に横たはつてゐた。私は二箇月前に、先生を診察したことのあるその場に、口を開いて、——呼吸はもう通つてゐなかつた——瞼を半分閉ぢ、

目の光は曇つて、瞳を少しも照してゐなかつた。夫人は、前よりも一層強く裂くやうな二度目の叫び出して、良人の上に飛びつき、接吻と涙とで、もはや愛撫をしても、無限の悲みを逐ひ拂ふことのできない、害はれたその動かぬ顔を埋めて、抱擁を始めたのだつた。逡巡つてそこにゐたケノーとルナールに向つて、私は言つた。

「お一人にしてあげた方が善いよ。」

他の人々は引退つてゐた。私は二人を控室の方に押しやつて、低い聲で質ねた。

「どんな風が起つたんだ？」

「僕達も貴下以上によくは知らないのです。ルナール君と僕は、ル・ガリツク中尉の側にゐたのです。序だがこの人も容態が悪いのです。さうだ。ルナール君すぐ上つてくれんといかんよ。僕は後から行く。ガルソンが一人狂氣になつて飛んで来て、先生の窓の下を通つた時、呻き聲が聞えたので、入つて見ると、先生はもう正氣がなくなつてゐたといふのでした。私どもは早速降りて来たのです。氣の毒な先生は、もう昏睡に陥つてゐられた。御承知のやうに、先生はモルヒネをお使ひだつたでせう。あまり強い注射を

なすつたんでせう。ありますよ、こんな事は……。それにしてもお氣の毒な奥様です！」ケノー博士はかういつた。吸泣が非常に激しく、隣室から聞えて来た。私は心配だつた。

「君、早速中尉の傍へ行つてくれたまへ。僕は奥様を宥めて見るから。」

私の動機はこの立會人を遠ざけるのにあつた。夫人の悲傷があまりなのに同情して、ケノーがうつかり秘密を洩らす言葉を出しはせぬかと私は戦慄した。この痛ましい夫婦の悲劇は、この死で大詰になつたのだ。オルテグ先生記念の名譽のために、永久の秘密が、その残酷な最後を包むのでなければならなかつた。幸に職業上の義務感が、ケノーの場合好奇心に打勝つた。

「では失禮しますよ。あの上の方の状態も重大ですから、脈は停頓しますし、不安で、眩暈があり、蒼白で、シヤイネストツクの呼吸で、尙明瞭の中にも、併發症状があるのですから、それに、オルテグ先生は、それを大變恐れてお出ででした。御承知の通り、私は手術をする意見でしたのに、しかも、到着早々からでした。臍の中では砲彈が随分

動かすにゐるのは定説です。オルテグ先生にも同じく、私ならば手術をしたのです。毎度申したでせう。私のいふ通り、先生の膽囊と腸の耳とを接合させるのでした。さうすれば黄疽も一掃される筈でした。苦痛も、少くとも數箇月は消えたでせう。先生のやうな方がモルヒネで抑へることを選ばれたとは不思議です。それに危険が……。まあ奥様をお聴きなさい。あゝ！　どんなにか奥様は愛してゐらしたんでせう！」

彼が戸を出るや否や、私は事務室に趨つた。オルテグ夫人は相變らず屍體に取りついてゐられた。私は夫人の手を取つて引放さうと試みた。夫人はするが儘になつてゐられた。恰も最初の神経的の危機が悲歎と喪心によつて、尙一層恐しい、打棄てゝあつたことの中に、解決がついたかのやうであつた。夫人の手を取つて、先生の横たはつてゐられる長椅子から遠ざけてゐる間に、凄い目つきで痙攣した顔を、先生の方へ向け、夫人は繰返していふことを止められなかつた。

「あれは自殺だ。私のために自殺なすつたのだ。絶望してわたしのためにお亡くなりになつたのです。私が悪いのでした。私のひどい卑怯からお亡くなりなつたのだわ。あゝ！　マルサルさん、何故あの紙片をお見せしたの？　ちつとも頼みはしなかつたのですのに。」

私は嘘をついて答へた。

「先生は自殺ではありません。」

今こそ、何故オルテグ先生が私を遠ざけたのか、私の目にも、殊に夫人の目には自然の死と見える筈の、寂しい、沈黙の自殺といふ悲痛な決心をされたのであつたか、よく了解ができた。夫人は先生が愛されたいとおもつていらしたやうには、もはや愛してゐられなかつたのだ。先生はその證據をつかまれたのだつた。その衝撃で、先生は、早速、顔も見ないで、死ぬことの決心をされたのだ。も一度好きなあの聲を聴くために、電話の受話器を握られたあの態度の面影が私に戻つて来て、私の胸を痛めた。その間にも、私は無駄な偽りをつゞけてゐた。

「奥様、理窟をおつけ下さい。自殺をなすつたのでしたら、一言なりともあなたに書き

残される筈です。それが明かな證據です……。何もないではございませんか。」

私は書類の位置を變へながら机を夫人に示した。

「何故私に書くものですか。私に何のいふことがありますか。」

「でも、あなたにお會ひになりたかつたのです。」

と、私は言ひ張つた。

「それは耐へられなかつたんです。あまりわたしがあの人を傷つけたのでした。あゝ！何故あの紙片を見せてあげて下さつたの？」

「あまり傷つけたからですつて？　でも、それを讀んでから後に、奥様のことについて、何といふ優しさだつたこと、奥様に此處に来て貰ひたいこと、御安心をおさせたいと、どんなにもどかしけにお話しになつたかをお聴きでしたら！」

實際、オルテグ先生の持たれた寛大な優しい態度をおもひ出すと、どんなにか、私はその英雄的なところ、殉教者らしいところを感じたことだらう。同時に、私はこの女性を騙したくはなかつたことを感じた。夫人は徐と目を亡くなつた人の上に据ゑて私の

言葉に耳を澄ましてゐられた。けれども、私は言ひ張つた。

「いゝえ、先生は自殺をなすつたわけではありません。ケノーも、私も、まだ何うしてお亡くなりになつたのか解りません。しかし、御病氣のせいだといふことは明瞭です。脈管閉塞、腦溢血、心臓麻痺と、幾らでも説明はつきます……。」「それは直ぐよく解ることです。」

と、夫人は言つて、私の手から抜けて、机の抽出の方に歩み寄られた。そこには、オルテグ先生がモルヒネを藏ふ所だつた。鍵が一つ、穴に挿した儘残つてゐた。夫人は叫んだ。

「これを御覽なさい！、この抽出をお明けになつたのです。私どもの毒薬は此處にあつたのです。」

亂暴に彼女は鍵を引き明けた。とある小宮の中に、小巖を見つけてそれを握つた。巖には白い粉が入つてゐた。彼女は窓から来る光に、それをさし翳した。レットルの上には恐ろしい方式のCAZAが見えた。それは加里青化物であつた。小巖は口迄一杯詰まつ

て、口の上には封印がしてあつた。オルテীগ夫人は呟いた。

「私達の毒薬だ！ 主人はこれに手をつけてないのだから。」

幸にも、この最初の疑惑を晴らしたい一心で、夫人は私の驚き認めたことに気がつか  
なかつた。大型の注射器が本立の上に載せてあつて、液がまだ少し見えてゐた。その液  
は後に調べて見たことだが、モルヒネであつた。ケノーは正にその事實に着目してゐた  
が、意味を知らずにゐた。先生は一番簡単な自殺の方法を用ひられたのだつたが、同時  
にそれは手懸りの一番つきにくいものであつた。先生は、持薬の毒の大量を注射された  
のだ。先生は死の道具を舊に仕舞ひ、着物を更へ、長椅子の上に横になる力をもつてゐ  
られたのだ。この詳細のことは、私の頭の中には、つきり喚起されて、私をも叫ばせると  
ころだつた。私は驚きを抑へて、機械的に抽出を締め、オルテীগ夫人に向つて言つた。  
「御覽下さい、罎に手をつけてないでせう。それが證據です。」

「主人は別の方法で自殺したのです。私に解らないやうに、何かの變事らしく想はせた  
かつたんです。何時ものやうに行届いてゐたので、だけど、私に會ひたくはなかつたん

です。」

夫人は眩掛椅子に崩折れた。両手はその小罎をしかと抑へ、呻きの聲が聞えた。

「でなければ、私たち二人のために準備してあつた毒を嫌つたんだわ。」

近づいて私は、夫人に極めて靜かに言つた。

「奥様、その罎を渡してください。」

夫人の返答はなかつた。そして頭を振つて、相變らず、小罎を抑へてゐる両手を胸の  
上に當てゝゐられた。私は言ひ張つた。

「奥様、その罎を私に渡して下さらないではいけません。御主人に代つてお願いします。  
御主人の最後の、此處で、一時間前に、私の前で表されました御意志は、奥様の生きて  
下さることだつたのですから。」

彼女は跳び上つて、眩掛椅子を夫人と私との間に挟み、一層堅く罎を握り緊めていは  
れた。

「力づくでは、これは貴下を取れない筈よ。」



甚だ短かつたが、私にはかなり怖しかつたこの場面は、一人の人物が入つて來たので遮られた。その人の前で、夫人はその場面を繼續することができるのであつた。その人は司祭の資格を有つたクールモン師で、今迄附添つてゐた瀕死のル・ガリツクから寄りされたのだつた。彼は入つて、丁度告白をした人が與へたばかりの啓示の後に、あまりにも明白な、この光景を見たのだつた。長椅子の上には死人、歎願してゐるやうな態度の、失神した私、オルテীগ夫人はといへば、眩掛椅子の背後にかくれて、野蕃な防禦の姿勢で、毒藥の罎を堅く握りしめてゐたのだつた。

「其處へいらしやつたのなら、神父さん、助けて下さい……。」  
私の擴げた手の様子が、十分に私の要求する救ひの性質を示してゐた。私の取戻したいと念つたのは、その罎であつた。しかも、早速驚いたことには、氣の毒な夫人は封印

を剝して、私達の前で自殺するかも知れない様子だつた。手からでも、その粉の一匙を口にしたら、それこそ萬事休するのだ。私が何とかして妨げようとしたことは、實は破局を早めることに一番確かな方法を用ひてゐたのだつた。遠くなつた今でも、私は戰慄する。猛り狂つてゐる者には、無法をもつてすることは無法のことしか決して惹起さないものだ。司祭は冷靜を失はなかつた。彼は一切を了解し、危険を認めた。私が「助けて下さい」を連呼したので、彼は私には答へないで、オルテীগ夫人に向つて、

「奥様、この上もない御不幸を承りました。私は御親愛の故人にお祈りを致しにまゐりました。お許し下さいますか。」

彼女は承知の旨を首肯した。彼は尋ねた。

「奥様も御一緒にお祈り下さいませんか？」

彼女は頭を荒々しく振つて拒んだ。クールモン師は言ひ張らなかつた。彼は長椅子の下に往つて跪き、十字を切つて祈りを始めた。私は依然夫人を見守つてゐた。「父よ」の句が司祭によつて唱へられ、彼女にも、私に向つてのやうに、途切れ々々に聞えて來

た。「……御心を成さしめ給へ……われらの罪を赦したまへ……われらを誘ひに委ねたまうな……」彼女の手が幾分強く握られてゐたのが解け、大きな二粒の涙が頬に沿うて流れるのを私は見た。如何なる力が彼女の上に働いたか、どうか、私は知らなかつた。靈の中心から、彼女の外に迸つた一つの力か？ 多分さうでもあらう。司祭から出て来た示唆か？ それも私の認めることだ。子供の時の遠い印象が、故人の側での弔ひの呟きと、その跪いた姿を前にして、新しく強く喚び返されたのか？ これも考へられる。最後に説明しないで、私はその事實を認めるのだ。その他に、この事實は、宗教的の訓練によつて作られた知能には、現實のものゝ直接知識や扱ひ方に、不思議に適したことを見せることがある。クールモン師は、自殺へとあはれに女の突進してゐるのを外らす唯一の方法を發見してゐたのだ。どれだけの時間のことであつたか？

彼は祈りから起ち上つて、物靜かな重々しい聲で、

「私は先生のために、奥様、平和をお願ひしました。先生は随分お働きでした。お苦しみでした。愛しもなさいました。神は深切で入らせられます。私どもに見えぬことを御

覽になります。先生に平和を下さいます。もし……」

彼の言葉は途切れた。そして殆ど歎願のやうに一層優しい調子で、

「奥様、私は今一つのことです。御勇氣にお継り下さい。お従弟のエルネストさんが大變に、大變にお悪いのでございます。お名残りの時間、多分その分秒も算へられてをります。あの方は貴女さまにお目におかゝりになりたい思召でゐらつしやいます……」

彼女は先刻のやうに、荒々しい拒絶の同じ動作で首を振つた。

司祭は故人を指して、言葉を挿んだ。

「この方のために過ぎないことかも知れません。私の存知ますところでは、ル・ガリツクさんが申上げたおぼ思されるのはこの方についてのことでございませう。」

彼女は「この方の？」を繰返し、それから私の方へ振向いて、

「マルサルさん、今日二人は會つたのですか？」

答へたのは司祭であつた。

「さやうでございます、奥様。」

「長いこと？」

「長いことでした。階上にいらして下さい。私は残つて此處で番を致してをります。」

「行きます。」

暫く経つてから彼女は言つた。

夫人は目の涙を拭くためにハンケチを取出してゐた。彼女から目を離さないやうにしてゐると、その中で彼女が青化物の罫を轉がしてゐるのに氣づいた。跡を跟けて行くと、階段のところ迄その様子がつゞけられた。彼女は部屋に入つた。私はこの最後の會見の祕密を尊重して、廊下に残つてゐる積もりであつた。彼女もル・ガリツクさんの前で自殺することはあるまいと考へてゐた。オルテীগ夫人の背後に、私のゐることを見つけた彼の方が、目配せで私を呼んだのであつた。不規則な呼吸が、續いた言葉を既に彼ははせなかつた。呼吸は急迫してゐた。とおもふと、また遲滞した。殆どある瞬間ごとに停まる程だつた。その間に、彼はかういふことができた。

彼は傍に控へてゐたケノーとルナールに向つて言つた。

「皆さん、私は従姉と話したいのです。マルサル博士はゐて下さい。」

この心持のかくれた動機は、すぐ私に解つた。彼のオルテীগ夫人に言ひたいことを、何も聞かないで、十分知つてゐた。そして私のゐることが、他の言葉をいふ誘惑のないことになる上に十分であつた。

ルナールとケノーは外へ出た。ケノーは高い聲で、

「中尉殿私どもは廊下にをります。あまりお疲れにならないで下さい。」と敢て言つた。そして、戸の側で、極低聲で、

「方法は何もありません。ビュルブに觸れて來ました。決つてゐます。」

瀕死の人は語り出した。途切れる言葉に、呼吸の更代が、發音する言葉より以上の苦しさを與へてゐた。それこそ實に苦痛が物を言つてゐるやうだつた。

「カトリーヌ、カトリーヌ、僕はマルサル博士の前で、ミシエルと話し合つた。兄さん

は、姉さんと一緒にしようとしたことを話した……。僕は兄さんのため濟んだことは知つてゐる。兄さんより生き延びないのが、姉さんの意志ではないかと案じてゐる……。カトリーヌ、姉さんは生きてゐなければならぬ。兄さんのためにもそれが必要だ。これから死ぬ私が、あの世のあることを断言する。その近いことを感じる。それが見える。それに觸る。あの世で苦しむことのあるのも知つてゐる。人は自分の過ちのために苦しむ。犯した罪のためにも。人はまた生きた人の善良な意志によつて、善良な行爲によつて、慰められることがある。これが眞理であることは、姉さんには解らぬ。それが間違ひだといふことは、姉さんに断言できない。これが姉さんの主人に今日言つたことだ。これが事實なら、姉さんの自殺は可哀さうなミシエルに、來世で重荷を負はせることだといふことを信じてくれ。それが眞理なら、姉さんの生命も、兄さんの役に立ち、慈悲にもなるものだと思つてくれ……。生きねばならぬことはよく解らう……。眞にさうならば、忍耐、謙遜、慈悲の裡に生きてゐる一分一秒でも、姉さんの良人のために無駄なものではない。献けたら何一つ無駄にならぬ。今僕の苦しんでゐること、これからのこ

と、献げてゐるのだから、失はれはしない。姉さんが光を受け、淨められ、生きるやうに、僕の死を献げる！……。」

尙、彼は言つた。

「可哀さうなカトリーヌ！　これから死ぬ僕は、姉さんの義務が、私より一層重く、難かしいものだといふことがわかる。一度にすべてを投げ出すことは簡単だ。が、僕がこの際までには大きに苦しんだ。人の受ける苦しみの底の底に、大きな慰めのかくしてあることを知つてゐる。では別れた。カトリーヌ、僕は誓つてくれとは言はぬ。僕の犠牲が姉さんの爲に無駄ではないだらう。さやうなら。神さまと御一緒に、かなしみの人の子と御一緒にあらせていたゞかう……。」

夫人が先刻、毒藥を握りしめるためにした、最後の頼みと同じ姿勢で、彼は胸の上に十字架を握り緊めた。

「さやうなら！」

夫人はかう言つて、負傷者の額に首垂れ、そこに接吻をした。彼は感謝と願ひの眼さ

して彼女を見つめた。その唇は感謝を吐いた。それは、もはや虫の呼吸であつた。切迫した假死を前にして、私はケノーとルナールと呼びに戸の方に走りよつた。

「君達来てくれ。腰部のボンクッションを試みねばならん。それをしに直ぐ登つて来るからね、ルナール君、道具を準備してくれたまへ。」

と、私は彼等に言つた。

かう言ひながら、私はオルテグ夫人を引張つてゐた。夫人は半分自動的の歩みで跟いて來た。彼女の良人の室に着いて見ると、相變らずクールモン師は、故人の傍で、祈り續けてゐた。私はハンケチに包んだ蠟を相變らず握りしめてゐた夫人の手を執つた。彼女の指は拒むことをしなかつたので、私は毒藥を取戻した。

「生きてゐて下さいませう？」

「諾」

と、夫人は答へた。

夫人は生きることにした。幾週間も、幾週間も過ぎた。死ぬ人の切な願ひに、また戦いてゐる夫人から毒藥の小蠟を取戻した日から、六箇月の長い日が経つた。先生の埋葬の時、それが濟むまで立會つて貰つた日に、夫人が生きる約束を守られることを理解した。それから三日後に、彼女はル・ガリツクの葬儀に列席した。この二つの葬儀は、彼女の顔を見受けた以外に共通のことはなかつた。先生の遺言書の、最初の附屬書の中で、信心深い公證人の當惑したことだつたが、無宗教の葬儀の要求があつた。ル・ガリツクに對する先生の憎しみが、その意志と必ずしも關係のないものではなかつた。われらが先生をパツシーの墓地に送つた十一月始の、何と悲しい午後であつたこと！ そこには以前、死を超えた豪華なモザイクの大理石記念碑が作られてゐた。知名の外科醫の遺骸の後からは群衆が薙めき合つてゐた。名もない中尉のつましい葬儀とは、それが一

から下まで、何たる對照のあることだつたらう。聖トーマ・ダカン寺で、八時に唱へられたバスの彌撒の後に、われらは遺骸をモンパルナス驛に運んで、其處からトレギエーに向けて、遺骸は出發したのだつた。ブルターニュの軍人は、その父、母、彼にいたるまで繰返され、同じ信仰を有つてゐた先祖代々の人々が眠つてゐる、郷里の土の下に睡りに行つたのであつた。その二つの葬儀を比較して、私は一つの象徴を認めるのだ。士官は聖體拜領の裡に生き、その裡に死に、その中に憩うてゐる。氣の毒なわが先生が、死の中に寂しく残つてゐられること、悲痛な臨終の時にさうであつたと同じであつた。最期に非常に近くなつた時、胸を刺すやうな調子で、「何といふ人間は寂しいものだらう！」と、私に告げられた先生の聲は今でも聞くやうだ。私はこのパツシーの墓地を通り過ぎる時、何といふ感慨で、アンリ・マルタン通りの並木道の前方傾斜になつてゐる巨きな壁を打眺めることだらう。私は高い土塀を心で貫いて、この寒さ、沈黙、死の中にオルテグといふ天才と熱情とで亡くなつた人の、滅びて了ふ墓穴に往つて、その人に會ふやうな氣がする。私は先生を氣の毒に念ふ。先生を助けてあげたい氣がする。そ

して、次の瞬間に、先生が今苦しんでゐられるとしても、其處ではないやうに想ふ。

まだ一人が、私のやうに先生を想つてゐる。それは夫人だ。今でも、私は窓から療養所の庭の、立派な老樹の下に、青くなつてゐる芝生を眺めてゐる。患者用の長い椅子の上に、兵士が一人横になつてゐる。その傍に二本の松葉杖がある。その人の目は繻帯にかくれてゐる。この人は盲になり、腰を射られて、私どもの許へ送られて來たのだ。私どもはその脚を助けてあげた。視覚をこの人に取戻してあげることができなかつた。其傍にオルテグ夫人が腰を掛けて、その人に本を讀んでゐるのである。彼女の瘦せてやつれたこと！ 六箇月前からの彼女の生活は、あまりにも彼女の憔悴を説明してゐる。彼女は生きた。さうだ。彼女は生きてゐる。しかし。わが負傷者のつとめに、法外の活動をして、日々銷磨する中に生きてゐるのだ。戦争が長引くにつれて、私どもの病室は空くことがない。我々の中には、草臥れてゐる者がある。オルテグ夫人はさうでない。第一週からの彼女の献身は、疾くに私どもの驚きであり、私どもの讃歎するところだ。良人の死から後には、私どもの讚美であると同時に、怖れでもある。幾晩も夜を通して、

一番酷い、一番人の厭がる、一番危険な仕事に、進んで當る彼女を見受けるのである。少しでも傳染病の嫌疑があると、其處に彼女はゐるのだ。彼女は晝間を捧げ、夜の看護にも献身してゐる。彼女は生命を献げてゐるのだ。彼女の祕密を知つてゐる私には、彼女の慈善の中には自殺がある、といふ印象が屢ある。彼女は尠からず愛した二人の男の矛盾した意志を、同時に満足させようと努力してゐるとも言へる。ル・ガリツクが願つたやうに、生きることゝ、オルテグ先生に約束したやうに死ぬことの二つだ。多少の休息を彼女のために得るやうに、私は特に盲人の世話をしていたゞくやうに、彼女に依頼した。つまらぬ仕事には相違ない。「しかしだ。」同じくさう力を浪費しては、健康が脅かされると心配してゐるクルモン師のやうに、「慰めには卑しい仕事はないのだ。」彼女の同意を決心させたのは、この司祭だ、彼がこの力を持つたことは、一つの仕事に彼女に於て成就することを證據立てるものだ。宗教上のノスタルジー（思郷病）は彼女を惱ましてゐる。彼女の人格の上に、相變らず働きかけてゐるのは、ル・ガリツクの人格だ。そして、その麗はしい魂は、——彼の示したやうに、——オルテグ先生その人

すら、忽ち生命に呼び返されたとしても、その行爲には嫉妬してゐられない程誠實で、正直なものだ。けだかい此夫人も、この人のため、非常に熱情的に信仰することを欲したのだ。昨日も、——以前よりも打明けて話される——夫人は告白して、

「あなたは、私が病院で過勞するといつて、お咎めです。私は他に氣の休まることをごさいます。晝も夜も働いた後、あまり疲れました時、おもふのですが、（ル・ガリツクの信仰することが眞理で、あの世があるものでしたら、また主人の魂が消えてなくなつてゐないで、何處かで苦しんでゐるものでございましたら、人々の爲にする少しのお助けにしましても、多分主人の上に落ちて来るものでございませう。）それこそ想ふだけの、しかも、疑はしことの多いことでございます。でも、その氣でゐますと、何ともいへぬ和ぎが、心の中に生れるのです。さも、何處からか感謝が來たかのやうでございます。でも、何處からでございますか？」

かう言つた女性のこの單純な質問は、死の苦しい不可避の問題を提出するより以外の、

何物でもない。實際不仕合せなオルテグ未亡人は、何を願つてゐるのだろうか。死者と生者との間に、永久の絶縁があるのか、それとも神祕の關係があるのか。もしわれらの現在の活動が、それ自身盡きるものか、それとも靈界の何處か他の處に延長があり、目に見える宇宙の第一最高の説明原理があるのだろうか。この延長があつて、死が別箇の意味を取るか、或は寧ろ延長があつて、始めて意味があるのか。さうでなくて、それが唯一つの終りならば、甲の死と乙の死との間に、悲傷以外に何の差別があるだろうか。この本質的な、われらの皆解決して置くべき、或は尠くとも熟考して置くべき問題を、普通の生活中には忘れてゐるのだ。世界的の大變亂、大きな怖しい戦争が、毎日、刻々、しかも、何時までも知れず、ヨーロッパの端から端の、幾百萬の人々に、戦つてゐる者に、銃後にゐる者に、戦死する者に、また生残つてゐる者に、個人に、家族に、國に、われら人類全體に對して提出せられてゐる時に、何うして、今日それに取憑かれずにもられるだらうか。多くの血、多くの涙が流されて、それが他に意味を有つてゐるやうか。それとも、この世界的の戦争は、群衆の精神錯亂が狂的に起つて、その唯一の結果が、

物理化學的分解、再成の範囲内に入つて、人間無數の有機體が、時機尙早に復歸したことになるのであらうか。この長い物語の終局に、浮上つて來るものは、またこの問題である。私が一つの貢獻をしたく念つたのは、その研究のためである。それはできたのか。何の値打があるのか。

この本を書き始めた時、私はそれを覺書とし、一つの觀察として纏めるのだといふことを言つた。覺書の主要性質は、正確であることだ。この頁はそれを所有してゐる。私はそれにこの正しさを與へることができる。しかし、挿話が私の記憶の前に甦つて來るにつれ、次第に大きくなる煩悶の中にあつて、それを書かずにはゐられなかつた。そしてその煩悶は、科學的態度ではなかつた。顯微鏡の中で涙を溢すことは、よく見究める上に、良い條件では決してなかつた。結論の際だから、すべての客觀性の條件である理知の冷靜を取返すことを試みよう。

で、事實を約めて見よう。その證明はこの觀察から出て來るものだ。その事實は、二つの主要なものゝ下に集めることができる。——一方には、あらゆる理知の武器を身に



つけ、運命のあらゆる恩恵を一身に受けてゐる優越人を認める。死が突然その前に立ち  
はだかつた。彼はそれに一種の見識をもつて面と向つたのだ。彼はそれに適應すること  
ができなかつた。死は感情的の全心意の否定を彼にあらはし、彼の感情生活の深いエネ  
ルギーは、それに反抗した。死は彼に理知的心意の滅却を告げさせた。彼の弟子は、彼  
の活動を續けること必定だ。彼の手術した患者は、彼の後に生残りをする。彼の存在し  
たことの記憶は亡びないが、彼の仕事の最も貴重な所得、反省で積まれた寶と一つの彼  
の思想、知識により永久の法則に彼の人物を聯想するその力、すべてそれが虚無の中に  
沈まうとする。彼の存在の全部の崩壊を、彼は悲壯な偉大さで受取ることになつた。が、  
その偉大さは、大きな打撃を受けたあきらめのものだ。それは抵抗不可能の、最大の、  
彼を粉碎するためばかりに生じたものだから、彼にとつては怖しい、壓力の下で、絶望  
的の姿勢で背を屈めてゐる精神だ。こんなのが、此處で考察されるものの中の第一のケー  
スだ。反對の側に、私は第二のケースがあるのを見る。それは、極めて單純な人間の、  
ル・ガリツクのしかも甚だ謙讓な行爲をする人だ。彼の知的世界觀も、同じく甚だ謙讓

なものである。彼は自家の學説を作つてゐない。その學説は他から受けたのである。オ  
ルテグと同じやうな人は、他から受けたものを輕蔑する。こんな人が是であるのか。  
ル・ガリツクのやうな人は、知らぬながらも、人生の解釋に、世紀的の長い經驗主義の  
名残を持つて來たのではなかつた。彼の前にも死は立ちはだかつた。傳統的の教義は、  
早速それを承認し、それをもつて努力の材料とし、自己に對しても、また他人に對して  
も、心を富ます機會とするのだ。その感情的心意は適應するのだ。その教義によれば、  
受する人の上に、己の犠牲が逆に轉じて行くものだとの確信で、自分の苦惱を献げるこ  
とができるからだ。その理知的心意も、同様に適應するものである。彼が己の救濟をい  
ふ時、自分でそれを肯定してゐるのだ。その救濟は、取りも直さず、彼の人格中最も善い  
ものを生かして持つてゐるのだ。彼の忍従は、一つの熱であり、歡喜であり、戀愛であ  
るのだ。他方の氣絶する時、彼は凱歌をあげる。他方が自己放棄をする時、彼は自己肯  
定をする。オルテグ式の人には、死は奸計や不條理から來る慘劇的の現象だし、ル・  
ガリツクのやうな人には、完結であり、完成だ。結論としては何う言つたらいいのか。

死といふことについて二つの假説の中で、二人の人物に実績を見ることができたのであるが、一方は利用し得るものであり、他はさう行かぬものだ。よく解ると、その方式は  
見地に類するものと見える程單純なものだ。私個人の推論からすると、如何にも種々の  
結果がある。私の臨床教育では、應用こそ色々の理論の最終的の試煉とおもつてゐる。  
醫學では、證明された眞理、即ち作用をする、つまり實驗的の眞理しか認めない。この  
見地から、置換が甚だ可笑しいやうだが、ル・ガリツクの方が、オルテグよりも科學  
的に見え、チードマンに實驗を示すマジアンチーに一層近いやうに見える。そして、後  
者が異議を挿んで、「ではビシアーの法則は何うです？」と言つた時、マジアンチーは  
答へて、「僕はその法則に拘泥してはゐない。實驗が矛盾するやうだつたら、法則の方  
が悪いのだ。」(註、フラツア・マジアンチーはポルドーに生れ、醫學上の名著がある(一七八)。  
三二一―八五五)。ビシアーもフランス著名の解剖學者(一七七―一八〇二)。  
と言つた。

私は一層明瞭にするために、實驗結果をも一度取返して、別の方式を出した。それは、

死が一つの最後に過ぎないものとすれば、意義のないもので、犠牲であれば意味があ  
るといふのだ。——但、言葉にはかくれた豊富の内容があるもので、意味といふ言葉で  
も、意義といふのと、方向といふ二重の値があつて深いものである。——しかし、犠牲  
其物はある意味がなければならぬ。或場合には、はつきり意味が捕へられると思ふこと  
がある。ドラノーエ、デュフィールなどが國家の爲に、塹壕で生命を献げた場合である。  
かやうな忠誠の總和が、軍隊を作るのだ。軍隊は國を救ふ。それこそ將來の爲に、現在  
が犠牲になるのだといふより他に何物もない。そして、まだ存しない將來が、何處から  
か啓示を受け、良心の無上命令がなかつたら、どんな權利でその特權を要求するの  
か分らぬ。こゝで又もやオルテグ夫人の疑問なる。「しかし、何處からなのでせう？」そ  
れから、犠牲が即時結果を生まない時は、何うなるだらうか？ 献身者が犠牲をして  
くても、その恩恵を受けない時、それを氣づきもしないだらうか。オルテグ夫人は、  
丁度ル・ガリツクの枕許にゐて、その意向の儘に生命を献げるのを聞いた。夫人は其場  
にゐないこともある筈だつた。毎日、兵は行衛不明になることもある。その者は戦友の

代りに殺されることもある。そして戦友はそれを知らなかつたり、犠牲にも拘らず、多分亡くなつたこともある。それでも犠牲はあつたのだ。それに意味のあるのは、人間の證人がない場合に、それを受ける誰かがある必要があり、人の爲に人がする行爲が何の結果もたず、誰もそれを知らない時にも、行爲を記録することのできる或精神がなければならぬ。若し知られず、無効の献身の證人がなかつたら、その献身は存在しなかつたやうなものだ。私どもの中のすべてがその時は反抗してゐる。他方、われらの審判者、保存をするその證人、その良心は、物的經驗で發見するのではなかつたら、この世で遭遇しないものだらうか。それが、物的經驗なるものが、現實をつくさない證據ではないか。そしてある日、私の前で、宗教經驗に關して長い議論の末、事實の規律に最も服従してをり、逢つた人の中で、最も誠實な學者の一人、米國のウイリアム・ゼームスといふ生理學者心理學者が言つた句を私は想ひ出す。

「理想と共感し一致することによつて、新しい精力がこの世に入り、新しい現象を生むものだ。」

理想といつて、彼は何を意味したのか。力の源泉だから力である。寂しくても、知能の源泉は、知能でなければならぬ。戀愛の源泉は戀愛でなければならぬ。前項の中に、實質上無かつたものは、斷定の中にある譯に行かぬ。ウイリアム・ゼームスは、われらの高級精神について、「それは精神よりも、もつと大きい、しかし、同じ性質の、精神の外に、宇宙に働いてをり、精神を協力しに来ることのある或物に屬してゐる」と言つた……。

「それこそ、他の言葉で書かれた、信條クレドの始まりです。」

と、先日、この二つの聖書の句を引用した時、クールモン師の私への答であつた。即ち我々の「全能の父なる神を信する」といふものゝ、しかし、それは、「それよりも、もつと大きい、そして、同じ性質の或物」ではないだらうか……。それは「彼を協力しに来ることもある」ものではないだらうか？……ウイリアム・ゼームスは「世の中に入る新しい力」のことを話してゐる。「われら人々の爲天より降りしもの」といふのは、何か異つたものをいふのであらうか？……

私はクールモン師の言葉を傾聴した。それに、ル・ガリツクとオルテীগ先生の死を見てから、一方の苦痛が、道徳的に充實してゐると、他方がストイックな、しかし、窮迫した甚しい悲嘆であるので、私はこの司祭に對して、それは實驗的に間違つてゐるとは、言ふことができなかった。尙更、師がオルテীগ夫人の煩悶や、私のそれを訊して、——想ふに敏感の人だから——附足してかう言はれた時、殊にさうであつた。「今日の惱めるあはれな人々は、何んなにか悲しみを抱いて眞理を求めることとせう。それは其處いらにある、何でもないのでした。しかし、探し求める裡の、その悲みこそ祈禱ではありませんか。私どもが、神のひまさまぬことを感じます時、取りも直さず、却て極近くにゐらせられるのでございます。」

一九一五、五——八、巴里

昭和十四年九月廿三日印刷  
昭和十四年九月廿七日發行

死

定價金一圓六十錢

譯者 廣瀬哲士

東京市麴町區九段一丁目七番地  
株式會社東京堂代表者

發行者 大野孫平

東京市牛込區改代町二十四番地

印刷者 田中末吉

東京市麴町區九段一丁目七番地

發行所 株式會社 東京堂

振替東京二七〇番

文學博士 佐佐木 信綱  
文學博士 五十嵐 力  
文學博士 高吉 義之  
文學博士 本野 潤之  
文學博士 本野 久辰 雄  
文學博士 本野 久辰 雄

共 著  
錄約刊行中  
內容見本進呈

# 日本文學全史 全十二卷

文學はあらゆる意味で、一國文化の象徴である。それは、その國の一般民衆が、その時代々々に於て、何を信み、何を懼れ、何を苦しめ、何を求めたかを、最も端的に表示したものである。一國の文學史は、この意味に於て、あらゆる歴史の精髄であり得る。吾等は、實にこれを學ぶことに依つて、始めて最も妥當に、最も直截に、その國民の精神生活の跡を辿り得るのである。

今日の我が日本が、將來に於て更に一層の飛躍と發展とを敢てする爲には、何よりも先づ、過去三千年に亘る我が文學の歴史を精細に検討することを以て、その急務の一つとする。かくすることによつて日本文化の眞髓を把握することなしには、一切の飛躍も發展も、つひに空疎に終ることを免れないからである。

吾等が、日本文學研究の領野に於て、現代日本の持つ最高權威者たる五先生の熱心な援助の下に、こゝに『日本文學全史』の刊行を企てた微意亦こゝに存する。即ち重ねて云ふが、吾等はこれに依

つて、日本文化そのもの<sup>すがた</sup>の相を最も正當に認識し、その現れを最も豊潤に鑑賞し、その本質を最も的確に把握し、そして又、かくする事に依つて、吾が富來文化建設についての誤らざる批判と、開かしき希望とを贏ち得ようとするのである。

願はくは吾等の意のあるところを諒とせられ、超大の同情と聲援とを賜らんことを、文藝家各位、教育家諸君、並びに日本文化に關心を持たれるあらゆる知識階級に向つて、衷々希ふものである。

第一卷	上代文學史	佐佐木 信綱 著
第二卷	上朝文學史	佐佐木 信綱 著
第三卷	上中世文學史	五十嵐 力 著
第四卷	下中世文學史	五十嵐 力 著
第五卷	室町文學史	吉澤 義則 著
第六卷	江戶文學史(上)	吉澤 義則 著
第七卷	江戶文學史(中)	高野 辰之 著
第八卷	江戶文學史(下)	高野 辰之 著
第九卷	明治文學史(上)	本間 久雄 著
第十卷	明治文學史(下)	本間 久雄 著
第十一卷	日本文學年表	吉澤 義則 著
第十二卷	日本文學年表	高野 辰之、本間 久雄 編

本間久雄著 文學概論 菊 判 四二八頁 定價三圓二十錢

本間久雄著 文學論攷 菊 判 五八〇頁 定價三圓二十錢

本間久雄著 英國近世唯美主義の研究 四六二倍判 四六九頁 定價七圓五十錢

本間久雄著 滯歐印象記 四六判 三六三頁 定價二圓二十錢

本間久雄著 婦人問題十講 四六判 四一〇頁 定價二圓五十錢

本間久雄著 生活の藝術化 四六判 二一二頁 定價一圓八十錢

本間久雄著 吾等如何に生きべきか 四六判 二三二頁 定價一圓八十錢

金子馬治著 現代哲學概論 四六判 四七八頁 定價一圓八十錢

金子馬治著 歐洲思想大觀 四六判 四〇二頁 定價一圓八十錢

金子馬治著 藝術の本質 四六判 五二三頁 定價二圓八十錢

高橋積二著 文學原論 四六判 三七八頁 定價二圓八十錢

高橋積二著 人本主義と浪漫主義 四六判 二四四頁 定價二圓

廣瀬哲士著 新フランス文學 菊 判 三八六頁 定價二圓五十錢

日高只一著 アメリカ文學概論 四六判 三八〇頁 定價二圓二十錢

ナチユリスムよりシユルレアリスム

メレジュエコーフスイ著  
昇曙夢 譯

改訂新版

### トルストイとドストエーフスキイ

(その生涯と藝術)

四六版五八〇冊  
フランクス式假綴  
定價一圓六十錢

想ふにトルストイやドストエーフスキイの如き偉大なる文豪は時や場所の制限なしに、いつの世にも萬人に愛讀せられ、且つ各時代々に新しく見直さるべき人々であらう。現にソヴェート・ロシヤに於ても我が日本に於ても最近古典復興の機運に際會して、兩文豪は再び讀書界に蘇り、新たに再吟味されつゝある。だが、何と言つても哲學的、宗教的乃至文化史的考察の深さに於て、藝術的鑑賞と理解の廣さに於て、また人生觀上いろ／＼な暗示に富んでゐる點に於て、本書の右に出づるほどの纏つた獨創的な研究は他にまだ出ないやうである。(改訂版序文の一節)

廣瀬哲士著

### ルソー 人生哲學

四六版四八七冊  
定價一圓八十錢  
送料十錢

近代思想の祖  
ジャン・ジャ  
ック・ルソー  
の思想體系の  
全貌始めて究  
明さる

太宰門氏評……廣瀬氏はもう二十年以上ルソーに親しみ、その作物を研究して居られるやうに仄聞する。(中略)廣瀬氏のこの書が、この偉大な精神を知る有益な貢獻に役立つものであることは何人も疑はないであらう。

新居格氏評……日本にもルソー的思想家出でよ、といふのがわたしの素論である。といふ意味は、ルソーは獨創的であり、彼の思想必ずしも論理的精緻があるといふのではないが、先驅的であると共に、強烈なエスプリを含んで居た。

内藤濯氏評……飽くまで平明な筆づかひのうちルソーの人と其思想とを鮮かにしてある一事に到つては、またとなく嬉しい。啓蒙の書であると同時に感激の書であらう。

ル  
瀬  
哲  
士  
著  
耶

蘇

定 四六  
價 判一  
料 五三  
十圓五  
四 十〇  
錢 錢

### 來出版及普

「ルナンの『耶蘇』に以上最早や耶蘇傳を書く餘地なし」とは多くの批評家の間に一致した言葉である。その流麗典雅まことに耶蘇を語るにふさはしいルナンの名文は、廣瀬氏により完全に邦文に移植され、既に久しく我國讀書界に喧傳せられてゐる。茲に十三版成るに及び之を假裝として廉價版を刊行することにした。今や古典復興の聲高き秋、この不朽の名著により永遠に清新にして偉大なる思想を汲み取給へ！

ベル  
グ  
ソ  
ン  
著  
笑  
の  
哲  
學

定 四六  
價 判一  
料 五三  
十圓五  
四 十〇  
錢 錢

現代哲學界の權威アンリ・ベルグソンの喜劇と笑に就ての研究である。生命の機械化が滑稽、笑の原因であることを幾多の例を索いて説き、進んで喜劇と悲劇の本質的差別について透徹した哲學を述べてゐる。しかも彼の藝術の本質を説き、笑が社會生活に及ぼす意義を論ずるや、誠にアリストテレス以來の哲學者の哲學的思索に對して、常に其掌をくゞり抜け、逃げ廻り、生意氣にも挑戦的態度を取つた道化役者「笑」が見事に帽子をぬいで我々の前にひざまづいたのに氣がつくであらう。譯文明快、原文の妙を寫し得て遺憾がない。



ベルグソン著  
廣瀬哲士譯

夢

と

哲

學

四六判  
定價金二圓五十錢  
送料十圓

故芥川龍之介は『ベルグソンの哲學は美しい透明な建築をみるやうな感じた』と云つた。この言葉を證明するものはベルグソンの初期の作品で、就中、本書に譯載した「夢」及び「形而上學序説」の二篇は、後年の大著にも見られない美しい詩藻が盛られ、ベルグソン哲學の眞髓に觸れる絶好の入門書である。

夢、夢、夢、——古來夢見る小説家や詩人は多い。しかし眞に實證的研究を徹底させた人は十九世紀までには無かつた。夢の研究熱は今世紀に擡頭し、そして將來いよいよ熾んになるであらう。

本書こそは「物質と記憶」「創造的進化」に先だつ名著であり正しくベルグソン哲學に入る最初の階梯である。

テ  
廣瀬哲士著

藝

術

哲

學

四六判  
定價金二圓五十錢  
送料廿二圓

本書は藝術とは何であるか、悲劇美とは何、喜劇美とは何といふやうな問題を形而上學的に或は心理學的に究めようとする種類のものではなく、言はず社會學的に、優れたる藝術家は如何なる時代、如何なる環境に生ずるものであるか、その民族的社會的宿命を特に觀察の焦點としたものであつて、普通の哲學的著述が個人的の思惟或は内省的反省から生み出されたるものとは異なり、嚴として動かすべからざる時代、民族、社會の客觀的事實から廣大なる觀照を藝術に對して成したるものである、近代フランスが生んだ第一流の名著として、苟も藝術に志ある者の必讀すべきものである。

1924

保田與重郎著 第二回選谷賞作品

### 戴冠詩人の御一人者

四六判三五〇頁  
定價一圓八十錢  
送料十四錢

▼川端康成氏評 谷崎潤一郎氏の「陰翳禮讃」と保田與重郎氏の「戴冠詩人の御一人者」とは近頃感嘆して讀んだものである。二つとも日本美論であるが兩極に立つやうに思はれるのは、その見られた時代のちがひにもよることだらう。また、筆者の年齢の隔りにもよることであらう。

▼藤原退蔵氏評 本書の細部の一々について言へば必ずしも異論がないのではない。しかしそれは専ら事實の解釋の相違に屬すべき事で、根源たる批評精神とは全くかかはる所がない。私はこの美しく輝やかしい批評精神こそ、まさに歴史の變革に際する我が新しい日に強く歌ひあげられねばならないと思ふ。古い傳統と精神は、新しく若い血に承け繼がれる事が可能だからである。

保田與重郎著 改版 日本の橋 四六判美裝 定價一、七〇 送料一四

786  
160

終

